

古仏語小文法

Edmond Faral 著

小栗栖 等 訳

20 mai 2006

Table des matières

第 I 部	音声学	17
第 1 章	はじめに	19
	1.0.1 発音表記について	20
1.1	正書法	21
	1.1.1 A, E	21
	1.1.2 子音の前の AL、EL	21
	1.1.3 EI	22
	1.1.4 EU, UE	22
	1.1.5 U	22
	1.1.6 Z	22
	1.1.7 X	22
1.2	単語の短縮	23
第 2 章	母音の変遷	25
2.1	強勢母音 (概論)	26
	2.1.1 開音節母音の場合と閉音節母音の場合	26
	2.1.2 鼻音 (M, N) の前に位置する場合	26
	2.1.3 母音が「L+ 子音」の前に位置する場合	27
	2.1.4 母音がヨッド (yod) (半母音) に近接している場合	27
2.2	各種の強勢母音	28

2.2.1	強勢母音の A	28
	A が開音節に位置する場合	28
	A が閉音節に位置する場合	29
	A の後ろに「鼻音 + 母音」が来る場合	29
	A の後ろに「L+ 子音」が来る場合	29
	A の後ろにヨッドが来る場合	29
	A の前にヨッドがある場合	30
	A がヨッドに先行かつ後続される場合	30
2.2.2	強勢を持つ広音の E	30
	広音の E が開音節母音の場合	31
	広音の E が閉音節母音の場合	31
	広音の E の後ろに鼻音が来る場合	31
	広音の E の後ろに「L+ 子音」が来る場合	31
	広音の E の後ろにヨッドが来る場合	32
2.2.3	強勢を持つ狭音の E	32
	狭音の E が開音節に位置する場合	32
	狭音の E が閉音節に位置する場合	33
	狭音の E の後ろに「鼻音 + 母音」が来る場合	33
	狭音の E の後ろに「鼻音 + 子音」が来る場合	33
	狭音の E の後ろに「L+ 子音」が来る場合	34
	狭音の E の後ろにヨッドが来る場合	34
	狭音の E の前にヨッドがある場合	34
2.2.4	強勢母音の I	35
	I が開音節もしくは、閉音節に位置する場合	35
	I の後ろに鼻音が続く場合	35
	I の後にヨッドが来る場合	36
2.2.5	強勢を持つ広音の O	36
	広音の O が開音節母音の場合	36
	広音の O が閉音節母音の場合	36

広音の O の後ろに鼻音が続く場合	36
広音の O の後ろに「L+ ヨッド」が来る場合	37
広音の O の後ろにヨッドが続く場合	37
2.2.6 強勢を持つ狭音の O	38
狭音の O が開音節に位置する場合	38
狭音の O が閉音節母音の場合	38
狭音の O の後ろに鼻音が続く場合 o のまま存続する。	38
狭音の O の後ろに「L+ 子音」が来る場合	39
狭音の O の後ろに湿音の鼻音が続く場合	39
狭音の O の後ろに半母音が来る場合	40
2.2.7 強勢母音の U	40
U が開音節、もしくは、閉音節に位置する場合	40
U の後ろに鼻音が続く場合	40
U の後ろにヨッドが続く場合	41
2.3 無強勢母音	41
2.3.1 語頭音節母音 A	42
語頭音節母音 A の原則	42
例外：語頭音節母音 A が開音節母音で c が前にある場合	42
例外：語頭音節母音 A の後ろにヨッドが続く場合	42
例外：語頭音節母音 A が母音衝突する場合	43
2.3.2 語頭音節に位置する、狭音の E と広音の E	43
語頭音節母音 E の原則	43
例外：語頭音節母音 E の後ろに流音が来る場合	44
語頭音節母音 E の後ろにヨッドが来る場合	44
語頭音節母音 E が母音衝突する場合	44
2.3.3 語頭音節母音の I	45
語頭音節母音 I の原則	45

	例外：語頭音節母音 I の後の強勢音節がさらに i を もつ場合	45
2.3.4	語頭音節に位置する、広音の O と狭音の O	45
	語頭音節母音 O の原則	45
	例外：語頭音節母音 O の後ろに鼻音の来る場合	46
	例外：語頭音節母音 O の後ろに「鼻音 + 子音」が 来る場合	46
	例外：語頭音節母音 O の後ろにヨッドが続く場合	46
	例外：語頭音節母音 O が母音衝突する場合	47
2.3.5	語頭音節母音の U	47
	語頭音節母音 U の原則	47
	例外：後ろに半母音が来る場合	47
第 3 章	子音の変遷	49
3.1	ラテン語の子音文字とその発音（訳者補足）	49
3.2	子音の変遷	50
3.2.1	C	50
	後ろに a が続く場合	50
	後ろに e, i の何れかが来る場合	50
	後ろに o, u のいずれかが来る場合	51
	cr の組み合わせ	52
	ct の組み合わせは	52
	cs (=x) あるいは sc の組み合わせは	52
	cl の組み合わせは	53
3.2.2	G	53
	a が後ろに来る場合	53
	後ろに e, i, ヨッドのいずれかの来る場合	54
	o, u のいずれかが後続する場合は	55
	gr の組み合わせ	55

gt の組み合わせ	55
gl の組み合わせ	55
gn の組み合わせ	56
3.2.3 T, D	56
母音にはさまれている場合	56
母音にはさまれた tr, dr の組み合わせ	57
l, r 以外の子音が後ろに来る場合	57
語尾で、母音の後ろに来る場合	57
母音間、語末以外の位置	58
「t+ ヨッド」の組み合わせ	58
「d+ ヨッド」	59
3.2.4 S	60
原則	60
語頭にある場合	60
「母音 +s ([z])+ 子音」	60
「母音 +s ([s])+ 子音」	61
3.2.5 P, B, V	61
語頭及び語の内部で子音のあとに位置する場合	61
流音 (r, l) 以外の子音が後ろに来る場合	61
母音にはさまれた場合 (ただし母音の一つは o, u のいずれか)	62
o でも u でもない二つの母音にはさまれた場合	62
前に母音、後ろに r の来る場合	62
前に母音、後ろに l の来た場合	63
「p+ ヨッド」の組み合わせ	63
「b+ ヨッド」の組み合わせ	63
語末の「母音 +p, b, v」	64
語末の「子音 +p, b」	64
3.2.6 R, L (M, N)	65

	原則	65
	1 の例外的な振る舞い	65
3.3	第一部の総括	66
3.3.1	原著者の注記	66
3.3.2	訳者による補足と参考文献案内	67
第 II 部 形態論		69
第 4 章	曲用 (DECLINAISON)	71
4.1	名詞の変化	71
4.1.1	男性名詞	71
	規則変化	71
	特殊例	72
4.1.2	女性名詞	74
	規則変化	74
	suor-seror	74
4.2	形容詞の変化	75
4.3	定冠詞の変化	75
4.4	数詞の変化	76
4.5	人称代名詞の変化	76
4.5.1	一人称	76
4.5.2	二人称	76
4.5.3	三人称	76
	男性	76
	女性	77
4.6	関係代名詞の変化	77
4.7	指示代名詞・指示形容詞の変化	78
4.8	所有代名詞・所有形容詞の変化	79

4.8.1	単数人称	79
	代名詞	79
	形容詞	79
4.8.2	複数人称	80
	代名詞	80
	形容詞	80
4.9	訳註：補足 :Tot の変化	81
第 5 章	動詞活用 (CONJUGAISON)	83
5.1	第二部の総括	83
第 III 部	統辞論・その他	85
第 6 章	若干の統辞論的事実 (QUELQUES FAITS DE SYNTAXE)	87
6.0.1	不定冠詞 (ARTICLE INDEFINI)	87
6.1	格の用法 (EMPLOI DES CAS)	87
6.1.1	主格	87
6.1.2	被制格	88
6.2	前置詞 (PREPOSITIONS)	88
6.2.1	前置詞の不使用	88
	人物あるいは擬人化された物を指す名詞の補語一般	88
	動詞の間接目的格補語の多く	88
	状況補語の多く	89
6.3	前置詞の使用	89
6.3.1	所有を表わす前置詞 a	89
6.3.2	比較級の後ろで比較項を導く前置詞 de	89
6.4	形容詞 (ADJECTIFS)	89
6.4.1	所有詞	89
6.4.2	最上級	90

6.4.3	一致	90
6.5	代名詞 (PRONOM)	90
6.5.1	人称代名詞 (PRONOMS PERSONNELS)	90
	主格人称代名詞の省略	90
	主格人称代名詞の冗語的用法	91
	Oil	91
	中性の (neutre) 主格代名詞の省略	91
	直接目的補語代名詞	91
	動詞の補語代名詞の省略	92
6.5.2	関係代名詞 (PRONOM RELATIF)	92
	関係節の並置	92
6.5.3	qui の意味の拡大	92
	qui を含む慣用表現	92
6.6	接続詞 (CONJONCTION)	93
	que の省略	93
	que の多義性	94
6.7	動詞 (VERBES)	94
6.7.1	人称 (Personnes)	94
6.7.2	数 (Nombre)	95
	集合名詞の主語	95
	一致	95
6.7.3	叙法と時称 (Modes et Temps)	95
	直説法	95
	命令法	95
	条件法	96
	過去分詞	97
6.8	語順 (ORDRE DES MOTS)	97
第 7 章	詩法 (VERSIFICATION)	99

7.1	音節数 (NOMBRE DES SYLLABES)	99
7.1.1	中舌母音 [e] の扱い	99
7.1.2	原則：音節数に数え入れる	99
7.1.3	中舌母音の e を音節数に数え入れない場合	99
7.1.4	複合母音字	100
7.2	詩節形式	100
7.3	韻と半階音 (RIMES ET ASSONANCES)	101
第 8 章	語義	103
8.1	第三部の総括	103
8.2	索引	104

訳者の序文

以下は、Edmond Faral の *Petite grammaire de l'ancien français - XII^e - XIII^e siècle* - (Hachette, 1941) の序文と音声を扱う章の全訳である。

これは私が最初に古仏語の手ほどきをうけた文法書である。大学院に進学が決まった春休みに全訳し、その後一度、後期博士課程に進学した春休みに、大幅に改訂した。その意味で、非常に思い出深い文法書である。

今回公開するにあたって、再度全面的に手を入れ直すことにした。今となつては、恥ずかしい限りの誤訳や、生硬な文体を直しつつ、大量の補足を入れた。中には、Faral 先生（もちろん、一度もお会いしたことはないが）に失礼な補足もかなりある。その大部分は、かつて私が古仏語を勉強し始めた際に、頭を悩ませた事柄に関するものである。古仏語文法の要諦を示す、という制約のもとで書かれた書物であるから、説明不足は致仕方がないということは十分に承知している。むしろ、簡潔にして要を得た記述には、今でも、新鮮さが感じられるほどである。それだけに、自分がかつて悩んだ箇所に補足を加え、今後古仏語を学ぼうとする人たちに、よりわかりやすい文法書を提供しようと努力するのは、私にとっては、Faral 先生への最大の恩返しのような気がするのだ。

現在でもフランスの書店で、この書物を目にするのは多いし、また、日本の書店でさえ、大量に入荷しているのを見かけることがある。十分に価値を認められ、多くの学生や教員に重宝されているのだろう。その点で、私にとっての最大の恩返し、他の人から見れば、ほんのささやかな恩返しも、多少の意味をもつだろうと思う。

傲慢な補足をつけたわりには、翻訳が間違っているではないか、あるいは、補足そのものが間違っているではないか、ということもあるに違いない。どうか、そうした場合には、是非ともご指摘とお教えをいただけた

ら、幸いである。

なお、今後も少しずつ作業を進め、いずれは、書物の全訳を公開するつもりである。

古仏語に初めて触れた時の喜びと驚きと困惑を思い出しつつ。

上記は本書第一部「音声学」を **html** 文書として、**web** 上に公開した際のものである。**pdf** 版となった本書は、上記で予告した「全訳」（若干の省略箇所あり）である。**html** 版からは、全面改訂し、組版を変更した他、各部末に文献案内、巻末に索引、別冊として動詞活用表を付した。

全て小栗栖個人の作業によるものなので、誤字・脱字、誤訳などが、残されているに違いない。繰り返しになるが、ぜひとも、読者のご指摘に期待したい。

なお、厳密に言えば、**Faral** 先生の著作権は日本国内の法律下でも、後二年足らず、有効である。しかし、次の二点の理由から、訳者の責任のもと、本書を公開する (<http://www.eonet.ne.jp/~ogurisu/>)。

- 本書を手にとった読者はおそらく原書も欲しくなるに違いない。本書はむしろ、原著の広告となり得る。原著が 1000 円前後の価格で現在も販売されていることを指摘しておこう (<http://www.amazon.fr> で、2010025415 を検索)。
- 訳者がさまざまな補足を施したため、本書は、おそらく、原著の倍近いボリュームをもつ（巻末の活用表を別にしても）。したがって、本書は **Faral** 先生と訳者の、一種の共著だと考えられる。
- 訳者は、少なくとも、この **pdf** 版からは、いかなる金銭的見返りも要求する意思がない。

なお、本書の組版は **A5** 版での印刷を念頭において行ったことを付け加えておこう。相当に完成度の高い組版になったと自負するが、これについ

ては、下記の謝辞を参照されたい。

第一版修正版に関して (2006年5月19日記す)

初版を公開してほどないうちに、愛知県立大学の岡田真知夫先生より、多数のご指摘をいただいた。指摘は網羅的かつ知見に富んだ、真の意味での批判であった。なかには、許しがたい誤りへの言及も含まれていたもので、早急に対処すべきと考え、急遽修正版を作成した。

岡田先生の批評に十分に応えるには、改訂版の作成が必要だということは間違いないが、時間の制約上、今回は、修正にとどめ、内容に深く関わる改訂は行わなかった。

—本書は下記の手助けがなければ存在し得なかった—

本書の組版には、**L^AT_EX2e** (日本語版: 奥村晴彦氏配布) を利用した。原稿作成の際には **T_EXShop** を、それに先立つデータ処理には **PERL** を活用した。また、発音記号の出力には、フリーフォントの **TIPA** が役立った。**mendex** がなければ、本書の索引作成には重労働を強いられただろう。

L^AT_EX2e の機能拡張に用いたパッケージについては、一つ一つ名前をあげることもできないが、**babel** にはぜひとも言及しておきたい。このパッケージがなければ、フランス語と日本語の混在には、絶望的な手作業を強いられたに違いない。

これらの優れたフリーウェア・フリーフォントの開発および日本語化に携われた全ての人々に感謝する。

原著著者による緒言

この書はフランスの古いテキストの研究に着手せんとする初心者の利用のために編まれたものである。つまり、最大限の簡略化が望まれた。この書が読解を容易にすることを第一に目指している以上、余分な概念を詰め込み過ぎることは避けねばならなかったのである。一旦手ほどきを受けてしまった者には、この書は恐らくは不十分なものとなろう。しかしながらその時、この書は初学者に対しその職責を果たし終えたということになるのである。

フランス語の変遷に関して最低限の歴史知識を提示したことは、先の約束の反故を意味するわけではない。そうした知識に精通しておくことは言語の諸事実を理解する助けとなる以上、十分に実用的な性格を帯びるからである。

ラテン語について知っておくことは、古い言葉の研究には非常に有効な助けとなる。それはちょうど現存のあらゆるロマンス語の習得にそれが大きな助けとなるのと同じことである。但し、ラテン語を知らない者もこの小冊子を役立てて、形態及び統辞法に関して必要不可欠の知識を得ることが望ましい。音声にあてた頁及び、若干の註はラテン語の知識を持つ者を特に対象としている。

その機会が与えられている以上、要望を二つばかり述べさせていただきたい。

その第一は学生たちに、ラテン語習得の際フランス以外のあらゆる国の学習者のように、ラテン語の単語にアクセントを置くことが実際にできるようになって欲しいということである*¹ ラテン語の母音や子音をどう発音するかは頭を悩ますのは専門家と好事家だけでよい。ラテン語から生じ

*¹ その意味で極めて賞賛に値する、しかし引き継ぐ者のなかった努力が、今世紀の初めに、リセ・モンテーニュの教授であったアメルによってなされた。当時そのリセでは文法教授達の賛嘆すべきプレイヤッドが開いていたのだ。

た諸言語を習得するにあたってラテン語を利用しようとするのは当然のことであるが、その為には強勢のある音節にアクセントを置けるようになることが基本条件である。

二つ目の希望は教科書として原典およびその抜粋を発行する者に、徹頭徹尾写本の書記法を尊重する学問的な校訂本を転載するのを止めてもらいたいということである。初学者にとって中世のテキストは困難に満ちているが、方言の特殊性、訳もなく用いられた古風な表現、書法の不統一、あるいは写字生の気まぐれといったものに関わる以上、それらの困難は容易に消滅させ得る。それらのテキストを通常のフランシアン方言、即ちイル・ド・フランス方言に書き換えたところで歴史的に大きな支障はない。中世の写字生自身この種の改編を斟酌しなかったではないか。それによってもたらされる負担軽減は読解を容易にし、従って、(これが大切であるのだが) 読書を促すであろう。諸碩学はやる気のある読者の意欲を殺ぐようなことばかりをしてきた。しかし肝心なのは、フランス人がフランス人となって以来書き綴ってきたものを、可能な限り多くのフランス人が読めるようにすることであるのだ。

第 I 部
音声学

第1章

はじめに

訳者補足

本来の意味での音声学

音声学とは、少なくとも今日では、ある言語の発音を研究する分野である。歴史音声学は、発音の歴史を明らかにしようとする。そうである以上、本来、ここでは、ラテン語の発音から、いかにして古仏語、ひいては現代フランス語の発音が生じたのかを説明するか、もしくは、古仏語での単語の発音を論じるべきである。

しかし、初めて古仏語で書かれた文献を目にした学生は（私もそうだったが）、まず、見慣れない語形にとまどう。そのため、**Faral**はこの章で、ラテン語の綴りがどのようにフランス語の綴りになるに至ったかを説明しているのである。逆から言えば、ラテン語からフランス語への発音の歴史、古仏語の発音を知るには、この章はあまり役には立たない。あくまで、単語を同定するためのヒントを与え、ラテン語からフランス語への移行に際して、単語が驚くべきほどの変化を遂げたという事実を知るためだけに、この章は書かれたのである。

訳者としても、誘惑がないわけではなかったが、できる限り、**Faral**の

意図を尊重して補足をつけた。すなわち、Faral の記述している事実が発音に踏み込んだ方が理解しやすい場合には発音にも言及し、また、音声学の基本的知識が Faral の記述している事実に整理をつけるのに役立つ場合には、それに言及した。本来の音声学については、巻末の参考文献一覧を参照されたい。

1.0.1 発音表記について

前項の通り、訳出や補足にあたっては、原著で言及されることが少ない発音を記述することもある。その際には二種の音標文字を併記した。[] 内は国際音標文字 (I.P.A) で、その後が続くのは、「ロマンス語学の発音表記」(フランス歴史音声学で伝統的に用いられてきた表記法) である。

I.P.A. は、多くの言語の発音を網羅し、個別言語を越えて、発音の近似性を表す点、広く普及していて多くの人に理解され易いという点で優れている。だが、ロマンス語の発音表記も、音声の歴史的変化や類縁性が直感的にわかり易いという長所を持っている。たとえば、ラテン語の [u] がフランス語の [y] になったとするよりも、u が ü になったとする方が、二つの音声の系譜関係が明瞭である。同様に、[ɛ] と [e] よりも、 ẽ と e という表記の方が、両音声の類縁性がはっきりする。したがって、一方か他方かの選択ではなく、両表記の特性に基づいた使い分けを行うべきなのである。

なお、I.P.A. とロマンス語学の表記で同じ文字が用いられる場合には、I.P.A. のみを示した。また、発音記号が字母と一目で区別できるよう、フォントを工夫した。すなわち、通常の綴り字は、centum と Bookman 書体を、発音の表記には [kentum] と Roman 書体を用いた。

とはいえ、あまりに細かな議論に立ち入るのを避けるため、発音記号でなく字母を用いた場合も多い。たとえば、a が ae と二重母音化した時、e が広音だったのか、狭音だったのかとか、その ae から生じた e がどういう発音だったのかまでを、今、問題とするのは、本章冒頭に述べた本書の目的を越えるのである。

1.1 正書法

中世のテキスト中の語をより良く識別し、同定できるように、最初の下ごしらえ、そして仮の見当付けとして、まず、いくつかの語を見てみよう*1。

1.1.1 A, E

字母 *a*, *e* は、子音が後続する鼻音 (*n* あるいは *m*) の前では、しばしば互いの代用として (特に *a* が *e* の代わりに) 用いられた。

[例] <i>antre</i> (= <i>entre</i>), <i>angin</i> (= <i>engin</i>), <i>trambler</i> (= <i>trembler</i>), <i>vaine</i> (= <i>veine</i>); 逆に : <i>mengier</i> (= <i>manger</i>), <i>pleindre</i> (= <i>plaindre</i>)

1.1.2 子音の前の AL、EL

子音の前の *al*, *el* という組み合わせは今日の *au*, *eu* という組み合わせに対応する。

[例] <i>altre</i> (= <i>autre</i>), <i>chevals</i> (= <i>chevaux</i>), <i>als</i> (= <i>aux</i>), <i>chevels</i> (= <i>cheveux</i>), <i>feltre</i> (= <i>feutre</i>), <i>els</i> (= <i>eux</i>)

*1 原注：ここで問題になっているのは文字記号間の対応関係である。文字の対応関係は文字記号によって示される音声の同一性を必然的に含意するというわけではない。

[訳者注記]

以下、ラテン語はスモールキャピタル、現代フランス語はイタリックで示す。ただし、古仏語と現代フランス語の単語の区別はいつも明確なわけではない (両者で同一の綴りが用いられる場合も多い)。古仏語とラテン語の単語は巻末索引に網羅的に収録されている。

なお、[] で挟まれた部分は、問題になる変化が生じる以前に何らかの原因でその部分がすでに失われていたことを、*のついた形態は推定に基づいており、文献で存在が実証されていないことを示す。また、 $A > b$ は *A* から *b* が生じた事を示す。

1.1.3 EI

古い ei という二重母音字は今日の oi という二重母音字に対応することが多い

[例] lei (= loi), mei (= moi), rei (= roi), seie (= soie)

1.1.4 EU, UE

今日の eu という二重母音字には、古い二重母音字 eu, ue の両方が対応する。

[例] fleur, heure, seule, — nuef (= neuf), prueve (= preuve),
muet (= meut)

1.1.5 U

字母 u は、古代ローマ人にはウ ([u]) と発音されたが、フランス語では早くからユ ([y] (ü)) という音に移行してしまった (我々フランス人が *une, lune, prune* で、そう発音するように)*²。それにも拘らず、ウ ([u]) によく似ている狭音の o ([o] (o)) はしばしば -u と表記され、テキストによって、同一の語に関しても、o, u, ou という表記法が競合しているのが見られる。

[例] por, pur, pour; amor, amur, amour.

1.1.6 Z

字母 z は ts, ds の組み合わせを表した

[例] denz (= dents), genz (gents), roonz (ronds)

1.1.7 X

字母 x は語尾にある場合、-us という組み合わせを表わした (ex. : chevax ← chevaux)。これが単独の -s と等価となるに至るのは後のことでしかないが、そこから *chevaux* という正書法が生じた。

*² 訳者補足：八世紀頃のこととされる。

1.2 単語の短縮

ラテン語の単語がフランス語に移行して行くにつれて、いかなる形態を取るようになるかは、特に、強勢が語中のどこに位置するかによって左右される。^{*3}

一般的規則として、強勢のある音節は保たれる。一方、強勢音節の後の音節（ポストトニック）は脱落する。強勢音節の前の音節（プロトニック）も同様であるが、単語の第一音節（語頭音節）に來ている場合はその限りではない。

[例] BONITÁTE > bonté; LIBERÁRE > livrer

[訳者補足]

語頭音節は特別な扱いをうけるので、實際上、プロトニックとして扱われる音節を持つのは、強勢音節よりも前に二つ以上の音節をもつ語だけである。たとえば、AR-MA-TÚ-RA では、ar-は語頭音節、-ma-はプロトニック、-tu-は強勢音節である。

単語の最後の音節（語末音節）も特別な扱いを受けるので、ポストトニックとは区別すべきである。従って、ARMATÚRA の-ra はポストトニックではなく語末音節である。ポストトニックとして扱われる音節を持つのは、強勢音節の後に二つ以上の音節をもつ語だけである。たとえば、VÉN-DE-RE では、ven-は強勢音節、-de-はポストトニック、-re は語末音節である。

最後に、語頭音節も語末音節も、強勢をもつ場合には、強勢音節として扱われることに注意しなければならない。つまり、

- 1) 強勢音節か? (「いいえ」の場合 2) へ)
- 2) 語頭音節か? / 語末音節か? (「いいえ」の場合 3) へ)
- 3) プロトニックか? / ポストトニックか?

^{*3} 原注：このラテン語のアクセントは、語尾から数えて二つ目の音節（パエヌルティマ）が長音節の場合、その音節に置かれる。若しこの音節が短音節の場合には、もう一つ手前の音節（アンテ・パエヌルティマ）に置かれる。

訳者補足：ラテン語からフランス語への移行に際して、単語の音節数は、通常減少—時に激減—する。一般論として、語の第一音節（語頭音節）とアクセントをもつ音節（強勢音節）以外の音節では、母音がほとんどの場合消滅した。たとえば、ラテン語の PAPILÍONEM は五音節の単語だが、これから生じたフランス語の *pavillon* は三音節である。そのため、どういった場合に母音が消滅するのかを知っておくのは大変重要なことなのである。

というフローチャートになる。

以下では、原文に従わず、上記の方針で用語に変更を加える。

しかし、プロトニックでも語末音節でも^{*4}、ラテン語の a はフランス語の中舌母音の e^{*5} の形で存続する^{*6}。

[例] ORNAMÉNTU > *ornement*; ARMATÚRA > *armeüre* (現代語:
armure) ; —MÚLA > *mule*; VÍA > *voie*

なお、語末音節の中舌母音の e は強勢音節の後で、子音群を発音するための支えの役割を果たすことがある

[例] VÉNDERE > *vendre*

[訳者補足]

「子音 +r」や「子音 +l」は、その多くのが結合グループ (*groupe conjoint*) と呼ばれる。これらの子音群は、後に母音がないと発音しにくいので、支えの母音が必要となる。同様の現象は、語末音節に加え、プロトニックでも起こる (例: QUADRIFÚRCU > *carrefour*)。ところで、Faral が二つ目の例としてあげる、CÓMITEM > *comte* で -e が存続したのは、全く別の理由によるものなので、誤解のないように削除した。

^{*4} 訳者補足：原文は「プロトニックでもポストトニックでも」となっており、非常に誤解を生じやすい。ポストトニックのうちで単語の最終音節に位置する場合にしか、a は存続しないのだから、訳文の通りに言い換えた。ポストトニック（語末に位置しない）の母音は、ほとんどの場合、跡形もなく消滅する。また、語末音節では a 以外の母音は多くの場合消滅する ([例] FLÓRE > *fleur*)。同様のことがプロトニックにも言えるが ([例] CLARITÁTE > *clarté*、プロトニックが閉音節の場合には、中舌母音の e として存続する。

^{*5} 訳者補足：原文では「無音の e」古仏語では語末の -e など、現在では脱落性をもつ e も、かなり明瞭にエと発音された (ただし、広音の e ([ɛ] (e)) でも、狭音の e ([e] (e)) でもない)。以下では、特に断ることなく、「中舌母音の e ([e])」と言い換える。「中舌母音」とは広音でも狭音でもない母音という意味である。

^{*6} 原注：原則としてラテン語の語尾変化語の諸形態のうち、今日まで存続して来たのは対格形である。しかし、これらの語尾の -m は極めて早くから発音されなくなってしまった。ここで BONITATE (= BONITATEM) に -m を付けないのはそのためであり、以後の「例」においても -m は表記されない。

第2章

母音の変遷

上に原理を示したが、まだ、母音と子音がどのように変遷したかと言うことを知らねばならない。ラテン語の母音は以下の通りであった^{*1}

変化前	変化後
a	a ([ɑ, a] (a))
短音のĕ	広音の e ([ɛ] (e))
長音のē	狭音の e ([e] (e))
短音のĭ	狭音の e ([e] (e))
長音のī	i ([i] (i))
短音のŏ	広音の o ([ɔ] (o))
長音のō	狭音の o ([o] (o))
短音のŭ	狭音の o ([o] (o))
長音のū	u ([y] (ü))

これらの母音は、強勢を持っているかどうか、すなわち強勢母音であるか無強勢母音であるかで、異なった運命をたどった。

^{*1} 訳注：原文の一覧表は、現在ではきわめて不適切なものと思われるので修正した。ラテン語の母音体系は紀元 2-5 世紀の間に、左列から、右列のものに徐々に移行した(母音により、変化の時期は異なる)。

なお、a の長短は通常問題にならない。変化後の広狭と一義的な関係がないためである。

2.1 強勢母音 (概論)

強勢母音には以下の場合がありえた。

2.1.1 開音節母音の場合と閉音節母音の場合

a) 母音は音節の最後に位置する場合と子音で終わる音節に属する場合の二通りがある。

音節の最後に位置する場合、その母音は開音節母音である。

[例] PARÁRE = PA-RA-RE ; LÉGERE = LE-GE-RE

子音で終わる音節に属する場合、母音は閉音節母音である。^{*2}

[例] HORTUS = HOR-TUS ; CORPUS = COR-PUS

2.1.2 鼻音 (M, N) の前に位置する場合

鼻音は前の母音を狭音化する傾向があるために、母音の変遷に影響を与える。また、鼻音の前の母音は開音節でであれ、閉音節でであれ、11世紀から14世紀にかけて、鼻母音化した(時期は母音によって異なる)、その際には、今度は、母

^{*2} 原注：(1) 歯音 ([t], [d]) と流音 ([l], [r]) からなる文字の組み合わせは、常に音節の始まりになる。それゆえ、PATREM, MATREM などといった単語では-aが音節の末部である (PA-TREM, MA-TREM)

(2) 英語では、母音が開音節母音であるか閉音節母音であるかによって非常に異なった具合に変化してきたことが知られている。例えば、tub と tube、far と fare がそうである

訳者補足：(1) 「子音 + 流音」は、多くの場合、*groupe conjoint* を形成し、あたかも一つの子音であるかのように扱われる。流音と *groupe conjoint* を形成するのは、歯音 ([t], [d]) に限らない。[pr], [br] や [kr], [gr] も同様の扱いを受ける。

(2) 英語と同様、仏語においても、音節が開いているか、閉じているかは、母音の運命に大きな影響を与えた。すなわち、閉音節に位置する強勢母音は基本的に大きな変化をしないのに対し、開音節に位置する強勢母音は [i] と [u] をのぞいて、二重母音化し (自発的二重母音化)、長い年月の末に、根本的にその音色を変えてしまったのである。

ただし、これは原則であって、後から見るように、母音の後に、鼻音や、「[l]+子音」、半母音が続く場合、その母音は、多かれ少なかれ例外的な運命をたどる。

音が広音化する傾向をもった。さらにその後は、母音が開音節にあるか閉音節にあるかによって扱いが異なってくる。

[例] FÁMES; VÉNDERE; PLÁNGERE

2.1.3 母音が「L+ 子音」の前に位置する場合

[例] PÁLMA; FÁLSA

[訳者補足] 子音前の l の母音化

子音の前の [l] は [u] になって、前の母音と二重母音を形成するため、母音の変遷に影響を与えるのである。

2.1.4 母音がヨッド (yod) (半母音) に近接している場合

ヨッドとは、現代フランス語では母音に先立つ -i, -y で表わされる音である。我々はこれを y と表記していく^{*3}。

[例] yeux, pieux, oublieux, envieux

[訳者補足] ヨッド (半母音・半子音)

ヨッドは I.P.A. では [j] で、ロマンス語学の表記では [y] で表される、弱い i のことであり、半母音・半子音とも呼ばれる。

母音の直前の i, e がヨッドになった (半母音化) のは紀元前 1 世紀頃からのことであり、たとえば、potione は [potjone] に、nausea は [nausja] になった。

また、[k], [g] は 3-5 世紀頃に母音に挟まれた場合や、[t], [s], [r] などの前に位置する場合にヨッドになった。ただし、当時は母音に挟まれたヨッドは重子音化したので、baca や plaga は [bajja], [plajja] となったのである (ラテン語では g は [g]、c は [k] と、常に発音されることに注意)。

^{*3} 原注：ラテン語では母音に先行する i (例：POTIONE) だけでなく、母音に先行する e ([例] NAUSEA) も半母音の価値を持った。ある時期からは特定の条件下で c, g もまた、半母音をいわば“発生させた”のである。([例] BACA, PLAGA)

上記のようにして生じたヨッドは、[j] に母音化して前の母音と二重母音になるため、母音の変遷に大きな影響を与えるのである。ところで、ヨッドは、硬口蓋子音(*consonnes palatales*) に由来することもある。Faral が本来のヨッドと硬口蓋子音を区別しないで、ヨッドと呼んでいるのは、そのためである。硬口蓋子音が発生する過程や、それが母音に与える影響は複雑であり、フランス語の発音の歴史を学ぶ場合、悩みの種になる。ここでは、基礎知識として、ヨッドの前の [s], [z], [t], [d], [n], [l]、ヨッドや e, i, a の前の [k] の多くが硬口蓋子音になること (正確には、硬口蓋化の度合いに差があるのだが、ここではひとくくりにする)、母音に挟まれた硬口蓋子音が直前に [j] (母音だが、必ず前の母音と二重母音を形成する) を発生させる場合があること、硬口蓋子音が前後の母音に狭音化の効果をもつこと、硬口蓋子音の影響で広音の [ɛ] (e) と [ɔ] (o) が二重母音化すること (非自発的二重母音化) を知っておいてほしい。また、母音の前の i だけでなく、e もヨッドになることは忘れやすいので、しっかり覚えておくこと。

それぞれの母音の変遷を説明づけるためには、以上のような、相異なった幾つかの事情が考慮に入れられねばならない。

2.2 各種の強勢母音

2.2.1 強勢母音の A

< a

A が開音節に位置する場合

e になる。

[例] CANTÁRE > chanter; MÁRE > mer; NÁSU > nés, nez

[訳者補足] A の自発的二重母音化

開音節に位置する強勢母音の **a** は、6 世紀頃に **ae** と二重母音化し、ついで単音化して **e** となった。自発的二重母音化と呼ばれる現象である。

A が閉音節に位置する場合

a のままで留まる

[例] ÁRBORE > arbre; VÁCCA > vache

A の後ろに「鼻音 + 母音」が来る場合

e となり、ai と綴られる。

[例] ÁMAT > aime; PLÁNA > plaine

[訳者補足]

開音節母音 **a** が鼻音の前にある場合には、**e** になるということ。開音節だから、他の場合と同様、6 世紀に二重母音化して **ae** となったのだが、後の鼻音の影響で **ae** の **e** が **i** になり、**ai** となった。ついで単音化して **e** となったのである。ちなみに、閉音節の場合には、自発的二重母音化はおこらない (**GRANDE** > **grand**)。とはいえ、この場合、**a** は鼻母音に変化し、現在に至っているので、音色が変化しなかったわけではない。

A の後ろに「L+ 子音」が来る場合

au となる。

[例] PÁLMA > paume; FÁLSA > fausse

A の後ろにヨッドが来る場合

e となり ai と綴る

[例] MÁIOR > maire; BÁCA > baie

[訳者補足]

MAIOR の i は半母音を表していた、当時は母音にはさまれた半母音は重子音だったので、発音は [majjor] (mayyɔr) である。BACA が [bajja] (bayya) という発音になったことはすでに述べた。どちらの場合も、[j] (yy) が母音化して、[a] と二重母音 [ai] を形成し、ついで単音化して e になったのである。

A の前にヨッドがある場合
ie となる。

[例] PIETÁTE > pitié

[訳者補足]

硬口蓋子音やヨッドが前にあると a は ie (発音は [je] (ye)) になる。上記の例では、[t] が硬口蓋子音になり、a に狭音化の効果をもたらした結果、ie が生じたのである。これはバルチュ効果という名前で呼ばれている現象である。

A がヨッドに先行かつ後続される場合
i となる。

[例] jacet > jist, gît

[訳者補足]

このヨッドも硬口蓋子音を意味する。j と c (= [k]) が硬口蓋子音である。上記以外の例をほとんど見たことがないので、あまり例がない現象なのだろう。硬口蓋子音は母音を狭音化する傾向が強いのだが、それに前後を挟まれたために、a が徹底的に狭音化してしまったのである。

2.2.2 強勢を持つ広音の E

[ɛ] (e) : < 短音の ě

広音の E が開音節母音の場合

ie となる。

[例] HERI > hier; PEDE > pié, *pied*; MEL > miel

[訳者補足] 広音の E の自発的二重母音化

開音節に位置する強勢母音の広音の [ɛ] (ɛ) は、3 世紀頃に [iɛ] (ie) と二重母音化した。これも a > ae と同様に、自発的二重母音化である。

広音の E が閉音節母音の場合

e のままで留まる。

[例] FÉRRU > fer; PÉRDERE > perdre

広音の E の後ろに鼻音が来る場合

ien となる。

[例] REM > rien; BÉNE > bien

[訳者補足]

広音の [ɛ] (ɛ) が開音節に位置する場合だけの話である (閉音節の場合については、34頁を参照)。[ɛ] (ɛ) > [iɛ] (ie) という変化は上に述べた自発的二重母音化である。

広音の E の後ろに「L+ 子音」が来る場合

eau となる。

[例] PÉLLE > peau; PORCÉLLU > pourceau

[訳者補足]

[l] が子音の前で母音化し [u] になることはすでに述べた。だから、[ɛu] (ɛu) になるはずなのだが、実際には [ɛ] (ɛ) と u の間に渡り音の [a] が発達し、三重母音になった。これは、[a] の発音が [ɛ] (ɛ) と [u] の中間あたりに位置するためらしい。

広音の E の後ろにヨットが来る場合

i となる。

[例] MÉDIU > mi; PRÉTIU > pris, *prix*

[訳者補足]

mediu では -di- が、pretiu では -ti- が硬口蓋子音を形成する。硬口蓋子音は母音に挟まれると直前に半母音を発生させる性質があるため、広音の [ɛ] (ɛ) は [ɛj] (ɛy) となる。のみならず、4 世紀頃には [ɛ] (ɛ) が二重母音化し [iɛ] (ie) になったため、全体で、[iɛj] (iey) となった。その結果、母音のイと半母音のィに前後を挟まれたエは、イの音に同化されてしまったのである。

ところで、この場合の [ɛ] (ɛ) の二重母音化は、硬口蓋子音の影響によって生じたものなので、非自発的二重母音化と呼ばれる。見た目には自発的二重母音化と区別しがたいが、硬口蓋子音はそれただ一つで、音節を閉じてしまうので、今の場合、[ɛ] (ɛ) は閉音節に位置し、本来なら二重母音化しないのである。

2.2.3 強勢を持つ狭音の E

[e], ɛ : < 長音の e、短音の ĩ

狭音の E が開音節に位置する場合

ei に、次いで、oi になる。

[例] TÉLA > toile; PÉRA > poire

[訳者補足] 狭音の E の自発的二重母音化

狭音の [e] (e) が、強勢をもって、開音節に位置する場合、6 世紀頃に [ei] (ei) と二重母音化した（すでに見た、a > ae, e > ie と同様、これも自発的二重母音化である）。ei は 11 世紀頃から、激しい変化を繰り返し、ある時期には oi という綴り通りに発音したが、1200 年を越えると、[we] (we) と発音するようになり、13 世紀中に、多くの場合、[wɛ] (wɛ) という発音に落ち着いた。パリ方言に起源をもつとされる [wa] という発音が広まるのは 18 世紀以後である。

狭音の E が閉音節に位置する場合

e のままで留まる。

[例] ÉSCA > esche (*amorce*); VÉRGA > verge

狭音の E の後ろに「鼻音 + 母音」が来る場合

e のままで留まり、ei と綴る。

[例] PLÉNA > pleine

[訳者補足]

実際には e のままでとどまったのではなく、開音節に位置する他の狭音の e と同様、ei になったが、他の場合のように、oi にはならず単音化して e になったのである (oi になった方言もある)。なお、Faral は第二の例として、TÉNEA > teigne をあげるが、これは、むしろ、ヨッド (TÉNEA > [tenja] (tɛnya)) の影響による変化の例と考えるべきだろう。

狭音の E の後ろに「鼻音 + 子音」が来る場合

en となる。

[例] VÉNDERE > vendre; FÉNDERE > fendre

[訳者補足] 狭音 E の鼻母音化

閉音節で二重母音化が生じないので、見た目には大きな変化はない。だが、音色は大きく変化した。12世紀には *en* は *an* と同じ音になってしまうのである。これは母音が鼻母音化したことによる。鼻母音では一般的に母音が広音化する。狭音の [ē] (ĕ) は広音の [ĕ̃] (ĕ̃) になり、最終的には、[ã] (ã) になったのである。ところで、広音の *e* の時には、後に「鼻音 + 子音」が続く場合の説明がなかったが、これはそういう例がなかったからである。7世紀頃に鼻音の前の広音の *e* は、すべて、鼻音の狭音化作用により、狭音になってしまったのである。

狭音の *E* の後ろに「L+ 子音」が来る場合

eu となる。

[例] CAPÉLLOS > *chevels*, *cheveux*; ÉLLOS > *els* > *eux*

[訳者補足]

l が子音の前で母音化し *u* になることはすでに述べた。二重母音 [eu] (ĕu) はすみやかに単音化し、最終的には [œ] (œ) か、[ø] (œ) になる。

狭音の *E* の後ろにヨットが来る場合

ei ついで *oi* となる。

[例] FÉRIA > *feire*, *foire*; PÉCE > *poix*

[訳者補足]

feria の *-ri-*、*pece* の *-c-* ([k]) が硬口蓋子音を形成する。硬口蓋子音は母音間にあると母音 [i] を前に発生させる性質があるので、その [i] と *e* が結びついて、二重母音になったのである。

狭音の *E* の前にヨットがある場合

i になる。

[例] CÉRA > **cire**; MERCÉDE > **merci**

[訳者補足]

ここのヨッドは硬口蓋子音を意味する。いずれの例でも c [k] が硬口蓋子音である。これは、すでに述べたバルチュ効果の一変種である。硬口蓋子音は狭音化効果をもっており、開音節の強勢母音 a を ie に、開音節の強勢母音 e (狭音) を i に変化させる。

2.2.4 強勢母音の i

[i] < 長音のī

l が開音節もしくは、閉音節に位置する場合

いずれの場合も、i のままで留まる。

[例] VENÍRE > **venir**; MÍLLE > **mil**

l の後ろに鼻音が続く場合

先と同様、i のままで留まる。

[例] LÍMA > **lime**; 語末音節では、VÍNU > **vin**

[訳者補足]

開音節母音の場合と閉音節母音の場合を区別した方が良い。

開音節では [i] は鼻母音 [ĩ] になり、[ē] (ē)、[ē̃] (ē̃) と広音化した。VINU は古仏語の時点では語末母音の脱落により、**vin** になっていたため、i は閉音節に位置し、[vē̃] (vē̃) となった。

一方、開音節の i も鼻母音化はしたが、期間が短すぎたため、広音化には至らなかった。LIMA は古仏語の時点で、**lime** であるから、i は開音節に位置し、そのままの音色を今日まで保つこととなったのである。

lの後にヨッドが来る場合

同じく、iのままで留まる。

[例] SUSPIRIU > soupir

[訳者補足]

-ri-が硬口蓋子音を形成する。母音にはされまれているので、直前(すなわち、iの直後)に [j] が生じる。が、[ij] (iy) という類似の音の連鎖は、速やかに [i] に単音化してしまった。

2.2.5 強勢を持つ広音の O

[ɔ] (ɔ) : < 短音のō

広音の O が開音節母音の場合

ue 次いで eu となる。

[例] COR > cuer, *cœur*; MOLA > muele, *meule*

[訳者補足] 広音の O の自発的二重母音化

広音 [ɔ] (ɔ) は、強勢をもって、開音節に位置する場合、4世紀頃に ue と二重母音化した。これも自発的二重母音化である。

広音の O が閉音節母音の場合

o のままで留まる。

[例] PÓRTA > porte; DÓRMIT > dort

広音の O の後ろに鼻音が続く場合

o のままで留まる。

[例] BÓNA > bone, *bonne*; 語末音節では、BÓNU > bon

[訳者補足]

開音節に位置する広音の [ɔ] (ɔ) は、二重母音化し *ue* となった (例: *comes* > *cuens*)。 *bona*, *bonu* も *buen*, *buene* となったが、極めて早い時期に *bon*, *bone* に取って代わられたのである。

閉音節に位置する広音の [ɔ] (ɔ) は鼻音の前では、7世紀に狭音化し、狭音の [o] (ɔ) となった。なお、*bon*, *bonne* で *o* の音が異なるのは、17世紀の時点に開音節に位置したか閉音節に位置したかによって生じた違いで、古仏語では同じ音であった。

広音の O の後ろに「L+ ヨッド」が来る場合

ue 次いで *eu* になる

[例] FÓLIA > *fueille*, *feuille*; DÓLIU > *dueil* > *deuil*

[訳者補足]

子音の前の *l* と混同しないように注意すること。*l* の後にヨッドがきた場合、*l* は硬口蓋子音になる。その影響で、前の広音 [ɔ] (ɔ) が二重母音化するのである。四世紀頃のことであるが、これは自発的二重母音化ではなく、硬口蓋子音の影響による非自発的二重母音化である。

広音の O の後ろにヨッドが続く場合

ui になる

[例] CÓRIU > *cuir*; BÓDIE > *bui*

[訳者補足]

CORIU の *-ri-*、BODIE の *-di-* がそれぞれ硬口蓋子音を形成する。それらの硬口蓋子音は母音に挟まれているので、直前に [i] が発生する。広音の *o* は *ue* と二重母音化するから、*uei* となるわけである。やがて、*u* と *i* に挟まれた *e* が消滅して、*ui* になる。

2.2.6 強勢を持つ狭音の O

[o] (o) : < 長音のō、短音のū

狭音の O が開音節に位置する場合

eu となる。

[例] FLÓRE > *fleur*; HÓRA > *heure*; SAPÓRE > *saveur*

[訳者補足] 狭音の O の自発的二重母音化

狭音 [o] (o) が、強勢をもって、開音節に位置する場合、6世紀頃に最初、ou と二重母音化した (自発的二重母音化) が、11世紀頃、eu に変化したのである

狭音の O が閉音節母音の場合

ou となる。

[例] CÓ(N)STAT > *couste, coûte*; TÓRRE > *tour*; GÓTTA > *goutte*

[訳者補足]

閉音節の [o] (o) は、ある時期に、狭音化して、[u] になってしまった。ou はその u を表す綴りにすぎず、いかなる、二重母音化も含意しないことに注意。なお、綴りは保守的なので、古仏語の時点では、*coste, tor, got(t)e* という綴りが使われていることも少なくない。この場合でも、-o-は [u] と発音しなければならない。

狭音の O の後ろに鼻音が続く場合 o のまま存続する。

[例] PÓMA > *pomme*; NÓMEN > *nom*; DÓNU > *don*

[訳者補足]

鼻音の前の *o* は広音、狭音に拘わらず、いったん、すべて、狭音になった後、今度は、鼻母音化の影響で広音の *o* になった。また、現在では、開音節に位置する広音の *o* は *ou* と一時的に二重母音化した時期があったともされている。したがって、母音の音色に変化がないわけではないが、そうした変化が綴り字を変化させることはほとんどなかったのである。

狭音の *o* の後ろに「L+ 子音」が来る場合
ou になる。

[例] ÓLTRA > *outré*; PÓLVERE > *poudre*

[訳者補足]

l が子音の前で *u* になり、前の母音と二重母音を形成したことはすでに述べたとおりである。

狭音の *o* の後ろに湿音の鼻音が続く場合
最終的に *-oin* となる。

[例] LÓNGE > *loing, loin*; TESTIMÓNIU > *tesmoing* > *temoin*

[訳者補足]

現在の *montagne* の *gne* が湿音の鼻音 ([ŋ] (ɲ)) である。現在では母音 (脱落性の *e* を含む) に挟まれた場合しか、湿音の鼻音は残っていない。逆から言えば、上の現象は母音に挟まれていない湿音の鼻音がたどった運命を説明したものである。湿音の鼻音は TESTIMONIU のように *n* の後にヨッドがきた場合や、*ng, nc, gn* などから生じた。湿音の鼻音は音節の終わりや、語末に位置した場合、前に [i] を発生させて、自身は通常の鼻音 [n] に戻った。その結果、*-oin* が生じたのである。

狭音の *o* の後ろに半母音が来る場合

oi になる。

[例] DORMITÓRIU > dortoire; VÓCE > vois, *voix*

[訳者補足]

-ri-, -c- ([k]) が硬口蓋子音を形成する。-ri-, -c-は、母音で挟まれてるために、直前に [i] を生じさせ、その [i] が前の *o* と二重母音を形成した。

なお、Faral が第三の例としてあげる、FENÓCULU > *fenoil*, *fenouil* は例として不適切。l の前の i は通常、l が湿音の [λ] (l) であることを表すマークにすぎず、*o* と二重母音を形成しているわけでないからである。

2.2.7 強勢母音の U

[u] (u) (< 長音の *ū*) > [y] (ü) :

U が開音節、もしくは、閉音節に位置する場合

どちらであれ、*u* のままで留まる。

[例] MÚLA > mule; MÚRU > mur; PÚRGAT > purge; NÚLLU > nul

[訳者補足]

ただし、八世紀末に、ラテン語起源の [u] が一斉に、[y] (ü) になった。この現象はフランス語に固有で、同じくラテン語起源のイタリア語やスペイン語では、現在でも -u- は [u] と発音する。

U の後ろに鼻音が続く場合

u のままで留まる。

[例] PLÚMA > plume; 語末母音では、COMMÚNE > commun

[訳者補足]

実際のところ、古仏語の時点で、開音節母音であったか、閉音節母音であったかで **u** の運命は全く異なる。

開音節の場合、鼻母音化した期間が短かったため、**u** はそのまま残った。それが **plume** の場合である。一方、閉音節の場合、**u** は鼻母音化していた期間が比較的長かったため、他の鼻母音の場合と同様、広音化が生じた。すなわち、[y] (ü) は当初狭音の [ø] (œ) になり、ついで広音の [œ] (œ) となったのである。これが **commun** の場合である。

U の後ろにヨッドが続く場合

ui になる。

[例] FRÚCTU > fruit; TRÚCTA > truite

[訳者補足]

t の前の c ([k]) は 3-4 世紀頃には、ヨッドに変化した。これについては、子音の変遷 (p. 53) でさらに説明を加える。

2.3 無強勢母音

検討されるべきは語頭音節にある母音だけである。というのも、強勢母音を除いて、原則的に存続したのは、語頭音節母音だけだからである。

[訳者補足]

以下、[n], [m] の前での場合が、どの母音に関しても記述されていないが、無強勢母音にも鼻母音化が起こり、閉音節では、さらに、広音化も生じたことは知っておいてほしい。

[例] CAMBIÁRE > changier; MONTÁNEA > montaigne

2.3.1 語頭音節母音 A

< a

語頭音節母音 A の原則

開音節でも、閉音節でも、普通、そのまま存続する。

[例] VALÉRE > valeir; LAVÁRE > laver; PARTÍRE > partir;
ARGÉNTU > argent

例外：語頭音節母音 A が開音節母音で c が前にある場合

a は e になる。

[例] CABÁLLU > cheval; CAMÍCIA > chemise

[訳者補足]

c [k] は [a] の前で、5 世紀頃に硬口蓋子音になる。その硬口蓋子音が [a] に狭音化の効果をもたらしたのである。「バルチュの効果」と呼ばれる現象である。[a] は当初狭音の [e] (ẽ) であったが、11 世紀に、開音節に位置する他の語頭音節の [e] (ẽ) と同様、中舌母音化した。

例外：語頭音節母音 A の後ろにヨッドが続く場合

ai になる。

[例] RÁTIONE > raison; PACÁRE > paiier, payer

[訳者補足]

ヨッド ([j] (y)) の前の [t] が硬口蓋子音になり、直前に [i] を生じさせること、母音に挟まれた c ([k]) が重子音のヨッド ([jj] (yy)) に変化し、最終的に母音化して [j] になることは、すでに述べたとおりである (28 頁参照)。これらの [j] が、[a] と二重母音を形成したのである。

例外：語頭音節母音 A が母音衝突する場合

— 時に、中舌母音 [e] の形でいったん残り、後に消滅する。

[例] MATÚRU > meūr, mūr; PAVÓRE > peor, peur

— 時に、次の母音と組み合わせられた a の形で残る。

[例] CATÉNA > chaaine, chaîne; CATHÉDRA > chaiere, chaire; VAGÍNA > guaïne, gaine; RADICE > rai (fort)

[訳者補足]

文字としては、a が存続するが、「[a]+ 母音」は二重母音を形成し、やがては、単音化するので、[a] の音が残ったわけではないことに注意。

2.3.2 語頭音節に位置する、狭音の E と広音の E

[e] (e) < 短音のĩ、長音のē; [ɛ] (e) < 短音のě

語頭音節母音 E の原則

開音節母音であれ、閉音節母音であれ、中舌母音 [e] になる。

[例] FENÉSTRA > fenestre, fenêtre; LEVÁRE > lever

[訳者補足]

中舌母音の [e] になるのは、実際には開音節の場合だけであり、実際、例に挙がっているのは二つとも開音節の例である。

語頭音節の e は、広音であれ、狭音であれ、そして、開音節に位置しようが、閉音節に位置しようが、いったん、すべて狭音化した。その後、閉音節の場合には、広音の [ɛ] (e) になったが (例：mercéde > merci)、開音節の場合には、中舌母音 [e] になったのである

例外：語頭音節母音 E の後ろに流音が来る場合

[l], [r] の後ろでは、広音の [e] (e) になる。

[例] PERDÉNTE > perdant; ERRÁRE > errer

[訳者補足]

後に来るのが [s] や破擦音の場合、狭音の [e] (e) になる ([例] : ispina > espine)。

— しかしながら、時には a にもなる ([訳者補足] 例外中の例外。)

[例] HIRÓNDINE > aronde; PIGRÍTIA > paresse; SILVÁTICU > salvage > sauvage

語頭音節母音 E の後ろにヨッドが来る場合

oi になる。

[例] MESSIÓNE > meisson, moisson; REGÁLE > royal

[訳者補足]

ss は s と同様、ヨッドの前で硬口蓋子音を形成する。母音間にあるため、直前に [j] が発生し、これが e と結びつき、ei という二重母音を生じさせるのである。// また、母音に挟まれた g (textipa[g]) は、c ([k]) と同様、重子音化したヨッド ([jj] (yy)) になる。これがやがて、母音化し、やはり、ei を形成する。そして、この ei は、強勢をもつ [e] (e) と同様の運命をたどり、oi になったのである (33頁を参照)。

語頭音節母音 E が母音衝突する場合

e の形で残り、やがて消滅する。

[例] VI[D]ÉRE > veoir, voir; SE[C]ÚRU > seür > sūr

[訳者補足]

母音衝突の場合、e は中舌母音の [e] になる。消滅するのは通常 14 世紀以降のことである。

2.3.3 語頭音節母音の I

< 長音のī

語頭音節母音 I の原則

開音節でも、閉音節でも、i のままで留まる。

[例] filāre > filer; hibérnu > hiver; vivēnte > vivant

例外：語頭音節母音 I の後の強勢音節がさらに i をもつ場合 e になる。

[例] DIVÍSIA > devise; FINÍRE > fenir, 現代では、*finir*

[訳者補足]

ラテン語の時代に起こった出来事であり、finire は、3 世紀にはすでに fenire になっていたらしい。

2.3.4 語頭音節に位置する、広音の O と狭音の O

[ɔ] (ɔ) < 短音のō; [o] (o) < 長音のō、短音のū

語頭音節母音 O の原則

開音節母音であれ、閉音節母音であれ、o, ou の何れかになる。

[例] CORÓNA > corone, *curonne*; MOVÉRE > *mouvoir, mouvoir*;
TORNÁRE > *torner, tourner*

[訳者補足]

確かに綴りでは、o と ou が混在するが、12 世紀以降、常に、[u] と発音された。後に o の発音が復活する場合もあるが、それはルネッサンス期のことである。

例外：語頭音節母音 O の後ろに鼻音の来る場合

m,n の前では、o になる。

[例] VOMÍRE > vomir ; SONÁRE > soner, sonner

[訳者補足]

鼻母音が広音化したので、広音の [ɔ] (ɔ) になる。

例外：語頭音節母音 O の後ろに「鼻音 + 子音」が来る場合

on になる。

[例] FONTÁNA > fontaine ; DOM[I]TÁRE > dompter

[訳者補足]

開音節の場合（前項）でも、閉音節の場合（本項）でも、o が鼻母音化し、広音の [ɔ] (ɔ) になることに違いはない。

例外：語頭音節母音 O の後ろにヨッドが続く場合

oi になる。

[例] POTIÓNÉ > poison ; OTIÓSU > oiseus, oiseux

[訳者補足]

ヨッドの前で、t が硬口蓋子音になるのは、すでに述べた通り。ここでも、母音間にあるために、直前に [i] が生じ、o と二重母音を形成する。

例外：語頭音節母音 **O** が母音衝突する場合

そのまま残り、次いで消滅する。

[例] RO[T]ÚNDU > roond, *rond*; CO[T]ÓNEU > cooing, *coing*

[訳者補足]

古仏語では roond ではなく、reond と最初の o はすでに中舌母音の [e] になっている。

2.3.5 語頭音節母音の U

長音の [u]

語頭音節母音 **U** の原則

u のままで留まる。

[例] MURÁLIA > muraille; JU[D]ICÁRE > jugier, *juger*

[訳者補足]

開音節であれ、閉音節であれ、扱いに違いはない。ただし、ラテン語では字母 **u** は [u] と発音されていたが、フランス語では八世紀以降 [y] (ü) と発音されるようになる。

例外：後ろに半母音が来る場合

ui になる。

[例] LUCÉNTE > luisant

[訳者補足]

c ([k]) は e の前では、硬口蓋子音になるが、母音に挟まれているために、直前に [i] を発生させる。それが u と二重母音を形成した。

第3章

子音の変遷

3.1 ラテン語の子音文字とその発音（訳者補足）

	有声子音	無声子音
唇音	b [b]	p [p]
唇歯音		f [f]
両唇軟口蓋音	v [w]	
歯音	d [d]	t [t]
歯擦音（スー音）		s [s]
硬-軟口蓋音	g [g]	c [k]
流音	l [l]	
流音	r [r]	
鼻音	m [m]	
鼻音	n [n]	

Faral は上記の表にまとめられた子音文字を扱っているが、これらの文字で表される音は、時代とともに変化する場合も多い。従って、一番左の列に書かれた音の名称や、文字の後に記された発音は、古仏語や現代フランス語に関しては、もちろん、「古典的」ではないラテン語に関してさえも、妥当性を持たない。ラテン語からフランス語への変化の歴史では、ある子音から他の子音への移行する際、想像以上に多様な子音が現れることを知っておいてほしい。

なお、次項以降を読み進める前に、一つだけ肝に銘じておいて欲しい。すなわち、母音には含まれた子音は、母音の影響を受けて変化し易いのである。

3.2 子音の変遷

3.2.1 C

後ろに a が続く場合

ch になる。

[例] CÁRRU > char; ÁRCA > arche; MERCÁTU > marché

[訳者補足] 第二次硬口蓋化

a の前で c ([k]) が ch ([ʃ] (š)) になったのは、[k] が硬口蓋子音になったためである。a の前での硬口蓋子音化は第二次硬口蓋化と呼ばれ、5 世紀に始まる現象である。

—ただし、その前に a, e, i のいずれかがある場合は、ヨッドになる。

[例] BÁCA > baie; DEĆANU > doyen

[訳者補足]

母音間の c ([k]) が重子音のヨッド ([jj] (yy)) になることはすでに述べた。重子音の前では、母音は自発的二重母音化を妨げられる。baca の a が強勢をもつのに、二重母音化して e にならないのはそのためである（第二次硬口蓋化が a の自発的二重母音化 (6 世紀) よりも前の出来事であることに注意）。

—また o, u のいずれかが前にある場合は、消滅する。

[例] jocáre > joer, juer; locáre > loer, louer

後ろに e, i の何れかが来る場合

c のままで留まり ss と発音される。

[例] CÉNTUM > cent; CÍRA > cire; CIVITÁTE > cité

[訳者補足] 第一次硬口蓋化

c のままで留まるのは綴り字上のことで、発音は [s] になる。これも、[k] が硬口蓋化に端を発した変化である。e, i の前での硬口蓋子音化は第一次硬口蓋化と呼ばれ、3 世紀に始まったとされる。第一次硬口蓋化と第二次硬口蓋化では、[k] の将来に差があることに注意されたい。すなわち、第二次硬口蓋化は、比較的弱かったため、[k] は [ʃ] (š) にしかならなかったのである。

—ただし、前に母音が来る場合は、s になって z と発音される。

[例] PLACÉRE > plaisir; VÓCE > vois > voix

[訳者補足]

母音に挟まれた無声子音 [k], [s], [t], [p], [f] は、400 年頃に有聲子音になった。おおざっぱな言い方をすれば、硬口蓋化した [k] も同じ時期に有聲音化した。そのため、c ([k]) は最終的に、[s] ではなく、それに対応した有聲子音 [z] になったのである。

ついで、もう一点注意してほしいのは、この硬口蓋化した c の前には [i] が発達し、直前の母音と二重母音を形成したことである。plaisir, vois の -ai-, -oi- という二重母音（現在は単音化している）はそのようにして生じたのである。

後ろに o, u のいずれかが来る場合

c のままで留まり k と発音される。

[例] CÓR > cuer, cœur; CÓRPUS > cors, corps

[訳者補足] 硬口蓋母音と軟口蓋母音

つまり、o, u の前では、[k] は硬口蓋化しない。硬口蓋化は硬口蓋母音もしくはヨッドの影響下に起こる現象であり、軟口蓋（上あごの奥の骨の無い部分）で発音される o や u の影響では、硬口蓋化は生じ得ないのである。

—ただし、前に母音がある場合は、消滅する。

[例] SECURU > seür > sūr

[訳者補足]

母音間の子音 [k], [s], [t], [p], [f] は 400 年頃に有声音 [d], [z], [d], [b], [v] になり、その後一部のものは消滅する（もともと有声音だった子音も同様）。消滅の条件は、子音によって異なる。

—後ろにヨッドの来る場合、c あるいは ss と表記され s の音になる。

[例] PROVÍNCIA > Province; SENECIÓNE > seneçon;
BRÁC[H]IU > bras

[訳者補足]

ヨッドの前で c ([k]) が硬口蓋子音になることはすでに述べた。これは 2 世紀に生じた現象である。上記の例では、c は一見、母音に挟まれているように見える。しかし、直後の i から生じたヨッド（半母音・半子音）は一種の子音なので、c は有声音化しないし、[j] も生じない。

cr の組み合わせ

cr のままで留まる。

[例] CRÉDERE > creire, croire; CRÍNE > crin

—ただし、前に母音がある場合は、「ヨッド +r」になる。

[例] SACCRAMÉNTU > sairement, serment; LÁCRIMA >
lairme, larme

ct の組み合わせは

「ヨッド +t」になる。

[例] fáctu > fait; lácte > lait

cs (=x) あるいは sc の組み合わせは

a 以外の母音が後ろに続く場合、「ヨッド +s」となる

[例] LAXÁRE > laissier, laisser; CÓXA > cuisse—FÁSCE >
faix; CRESCÉNTÉ > croissant.

[訳者補足] 疑似硬口蓋子音化

上記三項は、結局のところ、「母音 +cr, ct, cs」では c がヨッドに変化することを意味している。これは、疑似硬口蓋子音化(*fausse palatalisation*) と呼ばれる現象である。c から生じたヨッドは、やがて母音になり、直前の母音と二重母音を形成する。

cl の組み合わせは

cl のままで留まる。

[例] CLÁVE > *clef*; CLAÚDERE > *clore*

—ただし、前に母音がある場合は、湿音の [λ] (l) になる。

[例] MÁC[U]LA > *maille*; AURÍC[U]LA > *oreille*

[訳者補足]

湿音の [λ] (l) とは、別の言い方をすれば、硬口蓋子音の l であることはすでに述べた。それゆえ、cl > 湿音の l という変化は、硬口蓋化である。

3.2.2 G

a が後ろに来る場合

j になるが、時に g と表記される。

[例] GÁMBA > *jambe*; GAÚDIA > *joie*; VÍRGA > *verge*;
PURGÁRE > *purger*

[訳者補足] 第二次硬口蓋化

ラテン語では g は常に [g] と発音される。現代フランス語で、これを [ʒ] (z) と発音するような（さらには、綴り字さえもが j に変更されるような）場合が生じたのは、c と同様に、g が硬口蓋化したためである。a の前で硬口蓋化が生じたのは 5 世紀のことである（第二次硬口蓋化）。

—ただし、a, e, i のいずれかが前に来ている場合はヨッドになる。

[例] PAGANU > païen ; PLAGA > plaie

[訳者補足]

母音間の g は c と同様、重子音のヨッド ([jj] (yy)) になる。

—また o, u のいずれかが前にある場合は消滅する。

[例] ruga > rue (原注 植物の名：ヘンルーダ：強い匂のする薬用植物)

後ろに e, i, ヨッドのいずれかの来る場合

g のままで留まり j と発音される。

[例] GENTE > gent ; GENERU > gendre ; GELARE > geler ; ARGILLA > argile ; SPONGIA > éponge

[訳者補足] 第一次硬口蓋化

g のままで留まるのは綴り字上のことで、今日に至るまでに、音は [ʒ] (z̥) に変化している。これも g が硬口蓋子音になったことに端を発する。e, i の前での、g の硬口蓋化は 3 世紀に始まる (第一次硬口蓋化)。

—ただし、母音が前にある場合は消滅する。

[例] FLAGÉLLU > flaël, flëau ; NIGÉLLA > nielle ; CORRÍGIA > corroie, courroie

[訳者補足]

単に消滅するのではなく、直後のヨッドとともに重子音のヨッドになる。CORRIGIA の [gj] (gy) は [jj] (yy) となり、g の前の短音の i は狭音の e になって、全体で、ejj > ei > oi と変化したので、corroie という語が生じたのである。flaël, nielle には、flaiel, noiel という、ヨッドの影響が見える語形態も残されている。

o, u のいずれかが後続する場合は

g のままで留まる。

[例] GÚLA > gueule; ANGÚSTIA > angoisse;

—ただし、母音が前にある場合は消滅する。

[例] AUGÚSTU > *août*

[訳者補足]

母音にはさまれた子音が消滅する傾向をもつことはすでに述べた。

gr の組み合わせ

gr のままで留まる。

[例] GRÁNA > graine

—ただし、母音が前にある場合はヨッドになる。

[例] FLAGRÁRE > flairer; NÍGRU > neir, *noir*

gt の組み合わせ

ヨッドになる。

[例] DÍG[I]TU > doigt; RÍG[I]DU > raide

[訳者補足]

「母音 +c+r, t, s」で c がヨッドになることはすでに述べた。g にも同じ現象が生じるのである。

gl の組み合わせ

そのままで留まる。

[例] ÚNGULU > ongle; SING[U]LÁRE > senglier, sanglier

—ただし、母音が前に来ている場合、湿音の l になる

[例] VIG[I]LARE > veiller; COAG[U]LARE > cailler

[訳者補足]

「cl ([kl]) > 湿音の l ([λ] (l))」という硬口蓋化についてはすでに述べた (p. 53)。

gn の組み合わせ

湿音の n になる。

[例] AGNÉLLU > agnel, agneau; DIGNÁRE > daigner

[訳者補足]

実は、g という文字が、英語の parking などの ng で表される音 [ŋ] を表しているので、[g] という音とは直接関係のない話である (現代フランス語の motagne の gn が [g] という音と直接関係しない [ŋ] (ɲ) を表すのと同じである)。湿音の [ŋ] (ɲ) は [ɲ] と [n] の中間であるために、両者が平均して、湿音 [ŋ] (ɲ) になったらしい。湿音の [l] が硬口蓋子音であるのと同様、湿音の [ŋ] (ɲ) も硬口蓋子音であり、現代フランス語に残る唯一の硬口蓋子音でもある。[n] と比べて、舌が硬口蓋 (上顎の骨がある部分。骨がない部分は軟口蓋) に触れる面積が大きいのが特徴である。

3.2.3 T, D

母音にはさまれている場合

消滅する。

[例] VÍTA > vie; NATÍVU > naïf; SUDÁRE > suer; LAUDÁRE > loer, louer

[訳者補足]

子音の前後の母音は、間の子音を弱める効果をもつ。その効果が最大限に発揮された場合、子音は跡形も無く消滅してしまうのである。

母音にはさまれた tr, dr の組み合わせ

r, rr のいずれかになる。

[例] PÁTRE > *père*; LATRÓNE > *larron*; QUADRÁTU > *carré*

[訳者補足]

[tr], [dr] はともに **groupe conjoint** で、一つの子音であるかのように振る舞う。母音の間にある子音は弱まるので、その結果、[t], [d] は消滅したのである。

l, r 以外の子音が後ろに来る場合

消滅する。

[例] ART[E]MÍZIA > *armoise*; TEST[I]MÓNIU > *tesmoing, témoin*

[訳者補足]

特殊な事態なので混乱しないようにしてほしい。[] で挟まれた母音はプロトニックなので消滅する。そのため、**rtm** とか、**stm** という三子音の連続が生じ、発音の困難を避けるために、中間の子音 -t-, -d- が脱落したのである。ただし、こうした三子音の振る舞いは、t, d に限ったことではない。たとえば、DORM[I]T > **dormt* > *dort* では、-m- が脱落する。一般に、連続する三子音では、中間の子音が脱落するものなのである。

とはいえ、子音が三つ連続しても、「子音 1+ 子音 2+r, l」の場合、「子音 2+r, l」は **groupe conjoint** を形成する。これは一つの子音であるかのように振る舞うので、子音 2 は消滅しない。*estre* (< ÉSSERE) の語中音添加の -t- が消滅しないのはそのためである。

語尾で、母音の後ろに来る場合

消滅する

[例] DÓNAT > *done, donne*; FÍDE > *fei, foi*

—しかし子音の後ろでは、存続する。

[例] PÁRTE > part; GRÁNDE > grant

[原注]: この位置にある t, d はリエゾンのない限り、今日ではもはや発音されなくなっている。

[訳者補足]

古仏語では、通常、語末の子音はまだ発音された（消滅するのは、方言をのぞいて、14世紀以降）。ただし、t, d だけは9-11世紀に消滅した。だが、それは、「母音 +t, d」だけの話で、「子音 +t, d」での t, d の消滅は、やはり、14世紀以降である。この違いが、-er 動詞とその他の多くの動詞の間に今日見られる、三人称形の違いをもたらした。すなわち、-er 動詞の三人称では、語尾-t が donne-t-il といった倒置の場合以外には、綴りの上でさえも、消滅してしまったのである。

母音間、語末以外の位置

t は存続するが、時に、d に変化した。

[例] DÚB[ɪ]TAT > doute; CÚB[ɪ]TU > coude

[訳者補足]

どちらの場合も、ポスト・トニックの [ɪ] が消滅して、bt という子音の連続ができる。ところが、ポスト・トニックの脱落は、母音に挟まれた子音が有声子音化した紀元400年の前後で起こったから、DUBITAT > *dubtat > doute となる場合と、CUBITU > *cubidu > *cubdu > coude となる場合の、二通りがありえたのである。b の消滅に関しては後で述べる。

「t+ ヨッド」の組み合わせ

—子音の後に [s] になり ss 又は c と綴られる。

[例] fórtia > force

[訳者補足]

[tj] (ty) は硬口蓋子音を形成するため、[t] の音が変化し、最終的に [s] になったのである。

—母音の後ろでは [z] になり s と綴られる。

[例] *prétiat* > *prise*; *ratione* > *raison*

[訳者補足]

すでに述べたとおり、硬口蓋子音は母音に挟まれた場合、直前に [i] を発生させる。RATIONE の -a- が *raison* の -ai- になるのは、その [i] と -a- が二重母音を形成したからである。また、母音に挟まれた子音は多くの場合有声子音になるので (400 年頃)、*raison* の s は有声子音 [z] になった。PRETIAT も基本は同じであるが、*e* > *ie* > *iej* > *i* という風に母音が変わった (母音の変遷——「広音の e」を参照)。

「d+ ヨッド」

語頭あるいは子音の後ろでは j ([ʒ] (ž)) になる。

[例] *DIÚRNU* > *jor, jour*; *HÓRDEU* > *orge*

[訳者補足]

上の条件は結局のところ、「母音にはさまれていない場合には」と言い換えることができる。この場合には、「t+ ヨッド」の場合と同じように、硬口蓋化がおこり、d の音が変わった。

—ただし、母音の後ろでは消滅する。

[例] *BÁDIU* > *bai*; *MÓDIU* > *muid*

[訳者補足]

「母音に挟まれている場合」である。この場合には、単に消滅するのではなく、母音間の「g+ ヨッド」と同じく、重子音のヨッド ([jj]) になる。*bai* の ai は a と母音化したヨッドから生じた二重母音である。*muid* の場合はヨッドの影響で「非自発的二重母音化」が o に起こったのである (p. 28, p. 37)。

3.2.4 S

原則

一般に、そのまま残る。

[例] ŚABULU > sable; VERSÁRE > verser; FÁLSA > fausse;
GRÓSSU > gros; PLUS > plus

—ただし母音にはさまれる場合は、zの価値をもつ。

[例] CÁUSA > chose; PAUSÁRE > poser; NÁUSEA > noise

[訳者補足]

母音に挟まれた子音、[k], [t], [s], [p], [f]が紀元400年頃に有声子音[g], [d], [z], [b], [v]になったことはすでに述べたとおりである。

語頭にある場合

子音の前では、esに発達する*¹。

[例] SCÁLA > eschiele, eschele; SCÚTU > escu; STÁBULA > estable; SPÍNA > espine

[訳者補足] 語頭音添加

語頭音添加(prothèse)と呼ばれる現象で、ラテン語の時代にすでに起こっていた。語頭の「s+閉鎖子音」が、ガリア地方に住む人々は発音しにくかったために生じたものである。

「母音+s ([z])+子音」

[z]とrの間に、dが発達する。

[例] CÓ[N]S[UE]RE > cosdre > coudre; CÍS[E]RA > cisdre, cidre

*¹ 原注：eを発達させた後、s自体は現代語で消滅した ([例]：eschiele > échelle など)。

[訳者補足] 語中音添加

語中音添加(*épethèse*) と呼ばれる現象で、「子音 +r, l」の間に、子音が有声子音の場合には *d* が、子音が無声子音の場合には *t* が、発生する現象。語頭音添加と同様、発音しなれない子音の並びを発音しやすくするために生じた現象である。

「母音 +s ([s])+ 子音」

[s] と r の間に、t が生成する。

[例] ANTECÉSSOR > *ancestre*, *ancêtre*; CRÉSC[E]RE > *creistre*, *croistre*, *croître*

3.2.5 P, B, V

語頭及び語の内部で子音のあとに位置する場合

元のままで留まる。

[例] PÁTRE > *père*; BÁRBA > *barbe*; VALÉRE > *valoir*; SERPÉNTE > *serpent*; CARBÓNE > *charbon*; SERVÍRE > *servir*

[訳者補足]

母音に挟まれていない場合は、元のままでということ。ただし、これに当てはまらない例は多い。

また、*v* は、見かけ上はそのままでが、実際の発音は、変化した。ラテン語では、*v* は [w] を表していたが、古仏語では現代と同様 [v] と発音する。

流音 (r, l) 以外の子音が後ろに来る場合

消滅する。

[例] RÚPTA > *route*; CÁPSA > *chasse*; CÓRPU > *corps*; GÁLBINU > *jaune*

[訳者補足]

つまり、母音に挟まれてなくても消滅する場合があるということである。[pr], [br], [vr], [pl], [bl] ([vl] という並びは例がない) は *groupe conjoin* を形成するので、ただ一つの子音として振る舞う。

母音にはさまれた場合 (ただし母音の一つは o, u のいずれか) 同様に消滅する。

[例] PAVÓNE > *paon*; VIBÚRNA > *viorne*

[訳者補足]

p, b, v がどういう場合に、そして何時消滅したのかは、人によって微妙に異なった記述をしている。上記の記述はあくまで目安程度と考えた方がよい。

o でも u でもない二つの母音にはさまれた場合 v は元のままで留まるが、p, b は v になる。

[例] LAVÁRE > *laver*; RÍPA > *rive*; FÁBA > *fève*.

[訳者補足]

v も実際には音が変化し、[w] から [v] になったことは述べた。

前に母音、後ろに r の来る場合

同様に、v は元のままで留まるが、p, b は v になる。

[例] VÍVERE > *vivre*; CAPRA > *chèvre*; LABRA > *lèvre*

[訳者補足]

もう少し正確にいうと、「母音 + pr, bf, vr + 母音」の場合である。二つの子音は *groupe conjoint* を形成し、ただ一つの子音であるかのように振る舞うから、実際上、p, b, v は母音間に位置するのと同じ扱いになる。

前に母音、後ろに l の来た場合

b は b のままで留まるが p は b になる。

[例] TÁB[U]LA > table; DÚPLU > double

[訳者補足]

この場合にも、pl, bl (vl の例は存在しない) は *groupe conjoint* なので、p, b は母音間に位置するのと同じになる。そのため、紀元 400 年頃に p は有声子音になり、pl > bl となった。ただし、それ以上に発達して、vl になることはない（発音しにくいため）。bl の前では、なぜか、自発的二重母音化が生じなかったため、tabla の a は e にならない。bl > bbl という変化が生じたとする説と b-l という風に、*groupe conjoint* が二つの子音に切り離されたという説があるが、どちらも決定的ではない。

「p+ ヨッド」の組み合わせ

ch になる。

[例] ÁPIU > ache; SÁPIAM > sache; SÉPIA > seiche

[訳者補足]

理解しがたい変化なので、初心者は大いにとまどう。実際には、ch[ʃ] (š) は p からではなく、ヨッドから生じたがのだが、そう言われたところで納得できるものではないだろう。詳しくは、参考文献の書物を参照されたい。

「b+ ヨッド」の組み合わせ

j ([ʒ] (ž)) になる。

[例] TÍBIA > tige; RÚBIU > rouge; CÁVEA > cage; SÁLVIA > sauge

[訳者補足]

ここでの [ʒ] (ž) も **b** からではなく、ヨッドから生じたもの。「**p**+ヨッド」が [ʃ] (š) を、「**b**+ヨッド」が [ʒ] (ž) を発達させたわけだが、両者の違いは、**p** が無声子音、**b** が有声子音であることによる。無声子音 [ʃ] (š) に対応する有声子音は [ʒ] (ž) である。ところで、同様のことは「**v**+ヨッド」、「**m**+ヨッド」でも起こる([例]: *abreviare* > *abregier*)。

語末の「母音 +p, b, v」

p, b, v は **f** になる。

[例] *CÁPUT* > *chef*; *TRÁBE* > *tref*; *SÉBU* > *suif*; *BÓVE*; *boeuf*, *boeuf*; *NÓVE* > *neuf*

[訳者補足]

p, b はダイレクトに **f** になったのではなく、母音に挟まれて、**v** になり、語末母音の脱落后、無声子音化して **f** になったのである。

語末の「子音 +p, b」

p, b はそのまま残る。

[例] *CÁMPU* > *champ*; *PLÚMBU* > *plomb*

([原注] 今日 一般に、語末子音 (**p, b**) はもはや発音されない。)

[訳者補足]

実際には、*plomb* の **-b** は早期に消滅した。古仏語では、*plon*, *plom* という形態が用いられており、*plomé* という派生語さえも存在する。**-b** は、ルネッサンス以降にラテン語の語源に遡って、付け加えられたものだろう。

—ただし、語末の「子音 +v」の **v** だけは **f** になる。

[例] *SALVU* > *sauf*; *CERVU* > *cerf*; *NERVU* > *nerf*

([原注] 今日 一般に、語末子音 (**f**) はもはや発音されない。)

3.2.6 R, L (M, N)

原則

一般に、そのまま残る。

[例] RATIÓNE > *raison*; CRÚCE > *crois, croix*; LEVÁRE > *lever*; CLAÚDERE > *clore*; TÉLA > *toile*; PÍRA > *poire*

[訳者補足]

r, l と同様、比較的安定していたのは、n, m である。母音に挟まれているかいなかには拘わらず、r, l, n, m は基本的に維持された ([例]: ÁMAT > *aime*; ÁSINUS > *asne, âne*; FIRMÁRE > *fermer*; PRÉNDERE > *prendre*)。

l の例外的な振る舞い

l については三つの特性に留意すれば良い。即ち、
—前に母音、後ろに子音のある場合 l は u になる。

[例] ÁLBA > *aube*; CABÁLLOS > *chevaus, chevaux*; CAPÍLLOS > *cheveus, cheveux*; SOL[l]DÁRE > *souder*

[訳者補足]

これについては、すでに「母音の変遷」で言及した。l から生じた u は前の母音と二重母音、三重母音を形成するので、母音の姿を大きく変える。

—母音の後ろに位置する「l+r」の組み合わせでは、間に d が生じ、その後で、l が u になる。

[例] MÓL[E]RE > *oldre* > *moudre*

[訳者補足]

s のところで説明した語中音添加 (épethèse) の一例である。nr, mr, ml でも語中音添加は生じ、ndr, mbr, mbl となる ([例]: TÉN[E]RU > tendre; CÂM[E]RA > chambre; TREM[U]LÁRE > trembler)。[] で挟まれているのは、プロトニックやポストニックの母音である。これらの母音が消滅することで、ガリアに住む人々には発音しにくい子音の並びが生じたため、つなぎの子音が発達したのである。語中音添加は、本書で紹介した以外のものもあるが、それは参考文献の書物で補ってほしい。

—ヨッドと隣接した場合 l は湿音の l となる。

[例] PÁLEA > paille; MURÁLIA > muraille; MÁC[U]LA > maille;
VIG[I]LÁRE > veiller

[訳者補足]

同じく「n+ヨッド」は、湿音の [ŋ] (ṅ) となる ([例]: MONTANEA > montaigne)。いずれの場合も、硬口蓋化である。

ところで、m, n は前にある母音を鼻母音化したことも再度指摘しておこう。現代フランス語とは異なって、古仏語では、鼻母音化は母音が開音節にあるか閉音節にあるかに拘わりなしに起こった。また、鼻母音の後の n, m も当時はまだ発音されていた。n, m の前の母音が鼻母音化する時期は、a > e > o > i/u の順で 11 世紀から 14 世紀にわたる。

3.3 第一部の総括

3.3.1 原著者の注記

上述の一覧表は、事実の概観以上のものを与えはしない。多くの事柄が個別的に説明されなくてはならない。加えて、いかにしてある連続的な変遷を通じ、一群のラテン語単語からフランス語単語が生じ得たのか (例えば、PEDICULU ほどのようにして *pou* になりえたか) は、一見したところでは分からない。しかしながら、実験音声学により、一連の中間諸形態を全て復元し、ある形態から他の形態への移行が容易に起こることが、証明され得るのである。

3.3.2 訳者による補足と参考文献案内

実験音声学に関する Faral の記述は、おそらく、言い過ぎである。むしろ、実験音声学が歴史音声学に大いに貢献していることは論をまたないが、それでも、上記に書かれた事柄は証明済みの事実ではない。ラテン語文献に残された形態と中世フランスの文献に残された形態との間に連続性を説明しようとする仮説である。

とはいえ、歴史音声学は、緻密に構成された体系である。十分な理解と習得を目指すのであれば、うすっぺらなマニュアルの類に頼るべきではない。下記の書物は、どれも、ある程度の厚みをもっているが、手間をかけて（何度も！）読み通す価値がある。

1. Geneviève JOLY, *Précis de phonétique historique du français*, Armand Colin, 1995, ISBN: 2200216459
2. Geneviève JOLY, *Fiches de phonétique*, Armand Colin, 1999, ISBN: 220021863X
3. Gaston ZINK, *Phonétique historique du français*, PUF, 1986, ISBN: 2130440525ISBN

1 が初心者向けである。2 はラテン語の単語からフランス語の単語への通時的変遷を、単語ごとに追ったものである。1 を読んでいないと役に立たない。3 は 1 よりも本格的ではあるが、比較的、読み易い。

第 II 部

形態論

第4章

曲用 (DECLINAISON)

4.1 名詞の変化

4.1.1 男性名詞

規則変化

	単数	複数
主格	(li) murs	(li) mur
被制格	(le) mur	(les) murs

[原注] この単数主格形及び複数被制格形の-sは、ラテン語第二変化男性名詞(-us型)の単数主格、複数対格を標示する-sに相当する。語末に来るt, d, n、湿音のl、湿音のnと、この-sは組み合されて-tsになり、-zと綴られる。

[例] fruitz, monz, roonz, travauz, coinz

[訳者補足]

-zは[ts]という音を表す文字である。[t], [d]と[s]が合わさった場合の[ts]([d]は語末で無声音化して[t]になる)を表すのに-zが用いられたと考えれば、fruit, mont, roondに対する、fruitz, monz, roonzという形態には、何ら違和感がないだろう。

一方、[n]、湿音の [λ] (l)、湿音の [ŋ] (n) に関しては、これらの音と語末の-s との間に、語中音添加 (épenthèse) が起こり、[t] が生じることを知る必要がある。そこから、coing に対する coinz が生じる (-ng は二文字で湿音 [ŋ] (n) を表す。この湿音は語末の-s の前で [n] に変化する)。また、travail に対する, travauz もしかりである (-il は二文字で湿音 [λ] (l) を表す。この湿音は語末の-s の前で、通常の [l] と同様、母音化して、u になる。) このように、語末の-s はさまざまな連鎖反応を引き起こし、曲用を一見複雑なものに変貌させるのである。

特殊例

■ 単数主格形に-s の無い名詞

	単数	複数
主格	(li) maistre	(li) maistre
被制格	(le) maistre	(les) maistres

livre, gendre, pere, frere などの名詞が同様に变化する。

[原注] これらは、ラテン語では、主格形に-s を持たない第二活用 -er 型 の名詞 (LÍBER, GÉNER) あるいは、第三活用 -er 型名詞 (PÁTER, FRÁTER) に属していた名詞である。後者については、この場合、第二活用-er 型名詞と同様に扱われて来たのである。

■ Homme, comte

	単数	複数		単数	複数
主格	om, on	ome	主格	cuens	comte
被制格	ome	omes	被制格	comte	comtes

[訳者補足]

実は、これらは下記の不等音節数名詞の仲間である。ただし、後の例のように語源において強勢の位置が移動しない。om, on も古くは、cuens と同様、アクセント下では、huem となったが、早期に、無強勢の om, on に取って代わられた。

■ 不等音節数名詞

	単数	複数
主格	(li) compain	(li) compaignon
被制格	(le) compaignon	(les) compaignons

以下のような名詞が同様の変化をする。即ち、

単数主格	単数被制格	複数主格	複数被制格
fel	felon	felon	felons
gars	garçon	garçon	garçons
lerre	larron	larron	larrons
ancestre	anceissor	anceissor	anceissors
chantre	chantëor	chantëor	chantëors
mendre	menor	menor	menors
pastre	pastor	pastor	pastors
sire	seignor	seignor	seignors
traître	traïtor	traïtor	traïtors
emperere	emperëor	emperëor	emperëors
trovere	trovëor	trovëor	trovëors など

原注：単数主格と他の格との相違は、ラテン語で強勢が同一音節上になかったことに由来する (*COMPÁNIO, *COMPANIÓNE)。そのため、それぞれの音節が、音声変化の一般法則に従って、異なった変遷をたどることになったのである。

[訳者補足] 不等音節数名詞

要は、maistre と同様の变化だが、単数主格形だけが特殊な形になるのである。語源では単数主格形が他の形態と音節数が異なっていたので、不等音節数名詞と呼ばれる (古仏語の段階では音節数が異なることも多い)。なお、Faral が言及している強勢の位置の違いが、古仏語の形態に大きく影響を与えている例としては、上の *lerre, larron...* があげられる。*lerre* の語源である、LÁTRO では、アクセントを持つ a が e に変化したが (音声学を参照)、*larron* の語源である LATRÓNE では、a はアクセントを持たなかったため、そのまま残ったのである。なお、上記の例の *chantëor, emperëor, trovëor* には、訳者がトレマを付した。

[訳者補足] 男性名詞曲用のまとめ

上記の通り、三つのタイプの変化があるが、複数被制格形には-sが付き、複数主格形と単数被制格形には-sがないという点は変わらない。結局、タイプごとの違いは、主格単数形が、

- | |
|------------|
| 1)-sをもつ |
| 2)-sをもたない |
| 3) 特殊な形をとる |

という点にある。

4.1.2 女性名詞

規則変化

	単数	複数
主格	(la) fille	(les) filles
被制格	(la) fille	(les) filles

[原注]：語尾が子音である場合、単数主格は時に-sを取る。

[例] flors, genz (=gents), maisons, etc
--

suer-seror

suer は以下のように変化する

	単数	複数
主格	suer	serors
被制格	seror	serors

[訳者補足]

単数主格で-sをとる女性名詞には、実は独立した一項目を与えるべきである。多くの女性名詞の主格単数形が-sをとらないのは、ラテン語の時点で-sをもたなかったからである (fille < FILIA)。一方、-sをとる場合には、ラテン語の時点で-sを持っていたのである (flors < *FLORIS)。

soeur は、男性名詞の不等音節数名詞の仲間である。suer, seror... は SÓROR, SORÓRE... が語源である (なお、原本で複数主格形が seror となっているのは、誤植だろう。上記の通り、serors が正しい)。

[訳者補足] 女性名詞曲用まとめ

女性名詞の複数形は常に-sが付く。主格単数形は-sが付かない場合、-s付きの場合、特殊な形態の場合の三通りがある。そして、単数被制格はすべて複数形の-sを取り除いたものである。つまり、変化タイプによって異なるのは主格単数形だけである。すでに述べたとおり、同じことは男性名詞にも言える。

4.2 形容詞の変化

形容詞は男性形の場合、男性名詞と同じに、女性形の場合は、女性名詞と同じに変化をする。

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	bons	bon	bone	bones
被制格	bon	bons	bone	bones

しかしながら、女性形で、一群の形容詞が全て語尾-eを取るという訳ではない。

[例] fort, vert, loial, grant, etc.

これらはラテン語の第三変化形容詞に由来する形容詞である。第三変化において、女性形は語尾に-aを持たなかったのである。

4.3 定冠詞の変化

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	li	li	la	les
被制格	lo, le	les	la	les

[訳者補足] 前置詞と定冠詞の縮約

a + le → al, au ; a + les → als, as, aus

de + le → del, deu, dou, du ; de + les → dels, des

en + le → el, eu, ou ; en + les → els, es

4.4 数詞の変化

2

	男性	女性
主格	dui, doi	deus
被制格	deus	deus

3

	男性	女性
主格	trei	treis
被制格	treis	treis

20

	男性	女性
主格	vingt	vinz
被制格	vinz	vinz

100

	男性	女性
主格	cent	cenz
被制格	cenz	cenz

4.5 人称代名詞の変化

4.5.1 一人称

	単数	複数
主格	jo, jou (無強勢形 : je)	nos, nous
被制格	mei, moi (無強勢形 : me)	nos, nous

4.5.2 二人称

	単数	複数
主格	tu	vos, vous
被制格	tei, toi (無強勢形 te)	vos, vous

4.5.3 三人称

男性

	単数	複数
主格	il	il
被制格 (I)	lui (無強勢形 :li)	lor
被制格 (II)	lui (無強勢形 : le)	els, eus (無強勢形 : les)

女性

	単数	複数
主格	ele	eles
被制格 (I)	li	lor
被制格 (II)	li (無強勢形 : la)	eles (無強勢形 : les)

- 被制格 (I) : 用法上、ラテン語の与格に相当する。
- 被制格 (II) : 用法上、ラテン語の対格に相当する。

[訳者補足]

Faral は次のような脚注をつけているが、訳者にはその意図が全く理解できない。

Ex : *il dist — et dist a lui ou et li dist (atone) ; et vint pour lui veoir ou pour le veoir (atone) ; etc*

4.6 関係代名詞の変化

	単数および複数	
	男性および女性	中性
主格	qui	qui
被制格 (I)	dont	
被制格 (II)	cui	
被制格 (III)	que	quoi(無強勢 : que)

- dont は代名詞の機能を果たす副詞である。これは限定補語を標示することが多い。
- cui は普通ラテン語の与格の機能を果たす

[訳者補足] 与格と対格

与格はおおむね間接目的格（ドイツ語 3 格）に、対格は直接目的格（ドイツ語 4 格）に相当する。

4.7 指示代名詞・指示形容詞の変化

cil (**icil**) および、**cest** (**icest**) は、一般に代名詞として、あるいは形容詞として区別なしに用いられる。これらは以下の様な変化をする。

CIL

	単数		複数	
	男性	女性	男性	女性
主格	(i)cil	(i)cele	(i)cil	(i)celes
被制格 (I)	(i)cel	(i)cele	(i)cels, (i)ceus	(i)celes
被制格 (II)	(i)celui	(i)cele		

CIST

	単数		複数	
	男性	女性	男性	女性
主格	(i)cist	(i)ceste	(i)cist	(i)cez
被制格 (I)	(i)cest	(i)ceste	(i)cez	(i)cez
被制格 (II)	(i)cestui	(i)cesti		

[訳者補足] Cil, Cist

「**cil** も **cist** も代名詞としても、形容詞としても用いられる。しかし、**cil** は代名詞として、**cist** は形容詞として用いられることのほうが多い。それをさておいても、**cil** と **cist** の間には十分に明確な対立が存在する。すなわち、空間的、時間的、あるいは、心理的関心の領域において、**cist** が近接を指示するのに対して、**cil** は遠隔を標示するのである。」 (Philippe Ménard, *Syntaxe de l'ancien français*, Bière, Bordeaux, 1988)

つまり、**cist** は「これ、この」に、**cil** は「あれ、あの」に相当するということである。

4.8 所有代名詞・所有形容詞の変化

4.8.1 単数人称

代名詞

■ 一人称

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	miens	mien	meie	meies
被制格	mien	miens	meie	meies

■ 二人称

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	tuens	tuen	toie	toies
被制格	tuen	tuens	toie	toies

■ 三人称

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	suens	suen	soe, soie	soes, soies
被制格	suen	suens	soe, soie	soes, soies

これらの代名詞は、前に冠詞を取って形容詞の働きも果たす。

[例] li miens chastels : *mon château*; li tuens chastels : *ton château*

形容詞

■ 一人称

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	mes	mi	ma	mes
被制格	mon	mes	ma	mes

■ 二人称

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	tes	ti	ta	tes
被制格	ton	tes	ta	tes

■ 三人称

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	ses	si	sa	ses
被制格	son	ses	sa	ses

4.8.2 複数人称

代名詞

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	nostre	nostre	nostre	nostres
被制格	nostre	nostres	nostre	nostres

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	vostre	vostre	vostre	vostres
被制格	vostre	vostres	vostre	vostres

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	lor	lor	lor	lor
被制格	lor	lor	lor	lor

これらの代名詞は前に冠詞を取って形容詞の働きもする。

[例] li nostre chastels : <i>notre château</i> ; li vostre chastels : <i>votre château</i>
--

形容詞

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	nostre	nostre	nostre	noz
被制格	nostre	noz	nostre	noz

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	vostre	vostre	vostre	vostres
被制格	vostre	voz	vostre	vostres

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	lor	lor	lor	lor
被制格	lor	lor	lor	lor

4.9 訳註：補足 :Tot の変化

	男性		女性	
	単数	複数	単数	複数
主格	toz	tuit	tote	totes
被制格	tot	toz	tote	totes

第5章

動詞活用 (CONJUGAISON)

[訳者付記] 本来、この章に入る各種活用表は全て省略し、その代わりに、別冊の動詞活用表を付した。

5.1 第二部の総括

名詞・形容詞の曲用および、動詞の活用は、一見複雑に見えたとしても、単純な音声変化の法則に従っている場合も多い。それゆえ、古仏語の諸形態を理解するには、歴史音声学の知識が不可欠である。とはいえ、歴史音声学を修得するまで形態の学習にとりかかれぬのでは不便である。下記の書物は、音声学の知識が乏しい者にも、比較的読み易く書かれている。

1. Gaston ZINK, *Morphologie du français médiéval*, PUF, 1989, ISBN: 213046470X
2. Nelly, ANDRIEUX, *Manuel du français du Moyen Âge : 3. systèmes morphologiques de l'ancien français*, Bière, 1983, ISBN: 2852760215 Emmanuèle BAUMGARTNER との共著
3. André LANLY, *Morphologie historique des verbes français : notions générales, conjugaisons régulières, verbes irréguliers*, Honoré Champion, 1995, ISBN: 2852037165

1 は全品詞の形態を論じる。形態の共時的な解説ならびに、変化表を提示したのちに、ラテン語から古仏語へと至る通時的（歴史的）な解説を行い、方言形もとりあげている。2, 3 は対象を動詞の活用だけに絞っている。

第 III 部

統辞論・その他

第 6 章

若干の統辞論的事実 (QUELQUES FAITS DE SYNTAXE)

6.0.1 不定冠詞 (ARTICLE INDEFINI)

不定冠詞 **un** は複数形でも用いられ得る。

[例] **et avait unes granz joes et unes granz narines** : « *et il avait de grandes joues et de grandes narines* »

[訳者補足]

uns は、現代フランス語の **des** とは異なり、ペアや複数が前提となるものにつける冠詞である。原著は不定代名詞の用法としているが、単なるミスであろう。

6.1 格の用法 (EMPLOI DES CAS)

6.1.1 主格

主格は主語及び属詞を指示するのに使用される。

88第6章 若干の統辞論的事実 (QUELQUES FAITS DE SYNTAXE)

[例] **molt fu granz li orages** : « *l'orage fut très grand* »
il furent tuit vif : « *ils étaient tous vivants* »
halt sunt li pui : « *les montagnes sont hautes* »

6.1.2 被制格

被制格はあらゆる性質の補語 (名詞、動詞の補語など) を指示するのに使用される。

[例] **li reis reguarde Charle**
un an vos retendrai : « *je vous retiendrai pendant un an* »
or desjoindrai mes bués. : « *je détellerai mes bœufs* »
peintures a bestes et a serpenz : « *peintures représentant des bêtes et des serpents* »

6.2 前置詞 (PREPOSITIONS)

6.2.1 前置詞の不使用

以下のものは前置詞を使用せずに構成される。

人物あるいは擬人化された物を指す名詞の補語一般

[例] **li fils sainte Marie** : « *le fils de sainte Marie* »
la feste saint Jehan : « *la fête de saint Jean* »
la volenté le rei : « *la volonté du roi* »
l'enseigne saint Denis : « *l'enseigne de saint Denis* »

動詞の間接目的格補語の多く

[例] **se Deu pleüst** : « *s'il plaisait à Dieu* »
Deu porofrist le gant : « *il tendit le gant à Dieu* »
ne porrez mon pere faire honte : « *vous ne pourrez faire honte à mon père* »
donez la autre : « *donnez-la à un autre* »
un de mes pairs la laisserai : « *je la laisserai à l'un de mes pairs* »

状況補語の多く

[例] **jointes ses mains est alez a sa fin** : « *il alla à la mort en joignant les mains* »
l'espée ceinte est entrez el mostier : « *il entra au moutier avec l'épée au côté* »

6.3 前置詞の使用

以下のような前置詞の使用が認められる。

6.3.1 所有を表わす前置詞 a

[例] **fille a un comte** : « *la fille d'un comte* »
l'ost a l'emperëor : « *l'armée de l'empereur* »
cort a riche prince : « *cour de roi puissant* »

6.3.2 比較級の後ろで比較項を導く前置詞 de

[例] **meillor vassal de vos ne vi onques** : « *je ne vis jamais meilleur vassal que vous* »
ne poi rien plus de lui amer : « *je ne pus rien aimer plus que lui* »
mieus en valt li conreis del tresor l'amiral : « *son équipage vaut plus que le trésor de l'amiral* »

6.4 形容詞 (ADJECTIFS)

6.4.1 所有詞

冠詞に先行された所有代名詞は単なる所有形容詞と等価である。

[例] **li suens ahanz** : « *son effort* »
la nostre lei : « *notre loi* »
li miens cuers : « *mon cœur* »

6.4.2 最上級

最上級は必ずしも定冠詞に先行されない。したがって、**plus** はそれ一語で **le plus** を意味し得る。

[例] **uns des porz qui plus près est de Rome** : « *un des ports qui est le plus près de Rome* »
si vint plus tost qu'il pot : « *et il vint le plus vite qu'il put* »
me convient faire mieus que jo puis : « *il me faut faire le mieux que je peux* »
ce fu cil qui plus noblement arriva : « *ce fut celui qui atterrit le plus vaillamment* »

6.4.3 一致

幾つかの名詞を修飾する形容詞 (または分詞) は、最も近い名詞にのみ性数一致し得る。

[例] **furent enz el port traites les nés et li vaissel** : « *les nefes et les vaisseaux furent tirés dans le port* »
covert en sont li val et les montaignes : « *les vallons et les montagnes en sont couverts* »
es vos Charlon o sa grant gent venue : « *voici Charles arrivé avec sa grande troupe* »

6.5 代名詞 (PRONOM)

6.5.1 人称代名詞 (PRONOMS PERSONNELS)

主格人称代名詞の省略

動詞語尾が十分に人称を表示するので、主格人称代名詞はしばしば省略される。

[例] **molt me merveil** : « *je m'étonne beaucoup* »
malvais sermont commences : « *tu commences un mauvais discours* »
set anz a esté en Espagne : « *il a été sept ans en Espagne* »

主格人称代名詞の冗語的用法

逆に、時には、既に示された主格名詞を人称代名詞が繰り返す。

[例] **li borgois de Troies, quant il virent le desastre, il furent molt esbahi.**

Oil

主格人称代名詞は、代名詞 *o* (ラテン語の *hoc*) と結び付いて、肯定の返答として使用される。

[例] **Et vorriez vos que jo vos en venjasse ? — O je, fait-il.**
 : « *Et voudriez-vous que je vous en vengeasse ? — Oui [= o, je le voudrais], fait-il* »
Est-ce ci vostre anemis ? — O il, sire : « *Est-ce ici votre ennemi ? Oui [= o, il l'est]* »

これが今日の *oui* にあたる *oil* の起源である。

中性の (neutre) 主格代名詞の省略

中性主格代名詞はしばしば省略される。

[例] **soz ciel n'a home** : « *il n'y a homme sous le ciel* »
n'i a païen qui responde : « *il n'y a païen qui réponde* »
si voi qu'aler me convient : « *et je vois qu'il me faut y aller* »

直接目的補語代名詞

直接目的補語代名詞は、他の間接目的補語代名詞の前では、一般に省略される。

[例] **tient une charte, mais ne li puis tolir** : « *il tient une charte, mais je ne la lui puis retirer* »
uns riches om li desloa : « *un homme puissant le lui déconseilla* »

92第6章 若干の統辞論的事実 (QUELQUES FAITS DE SYNTAXE)

動詞の補語代名詞の省略

動詞の補語代名詞は、第一のそれに等置された第二の動詞の前で、たとえそれが異なった格を従える場合でも、繰り返されない。

[例] **vos ai amé et porté grant honor** : « *je vous ai aimé et je vous ai porté grand respect* »
chascuns l'ama et porta foi : « *chacun l'aima et lui porta fidélité* »

6.5.2 関係代名詞 (PRONOM RELATIF)

関係節の並置

関係節が並置される時、二つ目の関係詞は人称代名詞に置き換えられ得る。

[例] **cil qui nos ont deguerpiz et il sont alé as autres porz**
: « *ceux qui nous ont quittés et qui sont allés à d'autres ports* »

6.5.3 qui の意味の拡大

—qui はしばしば *celui qui* を意味する。

[例] **qui remandra, jamais ne l'avrai chier** : « *celui qui restera, jamais je ne l'estimerai* »

—上の用法が拡大されて qui が *si l'on* と等価になる。

[例] **Qui porroit faire que Rolanz morust, perdroit Charles son destre bras** : « *si l'on faisait que Roland mourût, Charles perdrait son bras droit* »
qui por ovrer rien ne recuevre, tot torne a perte : « *si pour son ouvrage on n'obtien rien, tout devient perte* »

qui を含む慣用表現

■ **cel n'i a qui** = *il n'y a personne qui*

「～でない人はいない・皆～だ」

[例] **cel n'i a qui ne s'escrit** : « *il n'y a personne qui ne s'écrie* »
n'i a celui qui ne plort : « *il n'y a personne qui ne pleure* »

—上の表現で、関係代名詞が消滅することもある。

[例] **soz ciel n'a home, après mon coup eüst nul recovrier**
 : « *il n'y a homme sous le ciel qui, après mon coup, aurait auncun salut* »
n'a home el mont, n'i convenist un jor user : « *il n'y a pas homme au monde à qui il ne faudrait y passer une journée* »

■ **com cel qui** = *en homme qui*

「～のような人として」

[例] **parla come cel qui bien faire le sot** : « *il parla en homme qui s'y entendait* »

■ **faire que** = *se conduire en*

「～として振る舞う・～らしく振る舞う」

[例] **molt i fist que traïstres** : « *il se conduisit en véritable traître* »
si fist que gentils et ber : « *il se conduisit en homme de cœur et en baron* »

6.6 接続詞 (CONJONCTION)

que の省略

接続詞 **que** は以下のものを示す節の冒頭ではしばしば省略される。

■ 目的補語

[例] **ço ne dit Charles n'i ait perdu** : « *Charles ne dit pas qu'il n'ait rien perdu* »
prions Dieu par sa pitié te mete en sa garde : « *prions Dieu que, dans sa bonté, il te prenne en garde* »

■ 結果

[例] **tant s'entraiment, l'un por l'autre ne sent dolor :**
 « *ils s'entr'aiment tant qu'aucun d'eux, grace à l'autre, ne ressent de douleur* »
Triastan a si grant dolor, onques n'en ara maior :
 « *Tristan a une si grande douleur, qu'il n'en aura jamais de plus grande* »

que の多義性

接続詞の que は極めて多様な意味を表す。

■ 原因

[例] **la joie fu grant, que il ne s'estoient pieça veü :** « *leur joie fut grande, car ils ne s'étaient pas vus depuis longtemps* »

■ 目的

[例] **haste toi, que je seie saus :** « *hâte-toi, pour que je sois sauf* »

■ 帰結

[例] **lors fu feste, que puis n'en ot plus bele :** « *alors il y eut une fête, telle qu'il n'y en eut de plus belle dans la suite* »

6.7 動詞 (VERBES)

6.7.1 人称 (Personnes)

tutoyer と vouvoyer の使い分けは、古仏語では、現代語のような意図を持たない。同一の文章、あるいは同一の文においてさえ極めて頻繁に両者が混用されるのも、何らかの意図を伴ったものというわけではない。

[例] **pren la corone, si seras coroné ; o se ce non, laissez la ester :** « *prends la couronne et tu seras couronné ; ou sinon, laissez-la* »

6.7.2 数 (Nombre)

集合名詞の主語

集合名詞を主語に持つと、動詞はしばしば複数形にされる。

[例] **la gaaignèrent nostre genz asez** : « *là notre armée fit beaucoup de butin* »
au port sont arrivé la Dieu chevalerie : « *la chevalerie de Dieu aborda au port* »

一致

二つ以上の主語を持つ場合 動詞はしばしば一番近くの物にしか 一致しない。

[例] **Mais Dieus et droiz aida a Bernier** : « *mais Dieu et le bon droit vinrent en aide à Bernier* »
molt fu granz li orages, la neif et li gresils : « *l'orage, la neige et le grésil furent très grands* »

6.7.3 叙法と時称 (Modes et Temps)

直説法

歴史的現在、単純過去、半過去が、今日のような一致を配慮せずに用いられ、時に一文中でこれらが入り混じる。

[例] **ço sent Rolanz que s'espée li tolt ; ovri les uelz, si li a dit un mot** : « *Roland sent qu'il lui enlève son épée ; il ouvrit les yeux et lui a adressé la parole* »

とりわけ描写においては しばしば単純過去が半過去の代りに用いられる。

[例] **vairs ot les uelz** : « *il avait les yeux vairs* »
li jorz fu bels et clers : « *le jour était beau et clair* »
icist Raous fu molt preudom : « *ce Raoul était un très sage homme* »

命令法

命令は以下の様にして表される

96第6章 若干の統辞論的事実 (QUELQUES FAITS DE SYNTAXE)

■二人称 は今日と同様命令法で表わされる。

[例] **conseilliez mei** : « *conseillez-moi* »
or m'oiiez : « *écoutez-moi* »

■三人称 は今日と同じく接続法で表わされるが、**que** は用いられない。

[例] **or viegne avant** : « *qu'il approche* »
quatre cent soient : « *qu'ils soient quatre cents* »

■一人称 はしばしば、「or+ 不定法」で表わされる。

[例] **or del mangier** : « *mangeons* »
or del bien faire : « *faisons bien* »

■禁止 はしばしば、**ne** + 不定法で表わされる。

[例] **Charles, ne t'esmaier** : « *Charles ne t'émeus point* »

■禁止を表す不定法 は時に主語を取る。

[例] **nel me celer tu pas** : « *ne me le cache pas* »

従属節中に命令法が用いられることがある。

条件法

条件を示す節中の動詞は、現在と同様の叙法及び時称を取る。但し以下のような場合もある。

■ 直説法単純未来

[例] **se je t'oblieraï, perdu soit la meïe destre** : « *si je t'oublie, que je perde ma main droite!* »

■ 条件法

[例] **se tu la porroïes rachater, volentiers te laïroïe aler**
: « *si tu pouvais la racheter, je te laisserais volontiers aller* »

■ 接続法

[例] **se le trovast, bataille i eüst** : « *s'il le trouvait, il y aurait bataille* »
ne fust por ce que tu ies messagiers, je te feïsse la teste trancher : « *si ce n'était que tu es messenger, je te ferais trancher la tête* »

—条件は、接続詞 *se (si)* を伴わない接続法 (主語を伴っている場合は倒置される) で、表わされる場合もある。

[例] **quar eüsse un serjant, je l'enverroie** : « *si j'avais un serviteur, je l'enverrais* »
ne fust ci mes pere, je tel diroie : « *si n'était mon père, je te le dirais* »

過去分詞

助動詞 *être* と結びつく場合、主語と一致する。助動詞 *avoir* と結びつく場合、目的補語の位置がどこであっても、一様に不変のままか、あるいは一致を行い得る。

[例] **sa moiller, que menacé avoit** : « *sa femme, qu'il avait menacée* »
ses blanches mains a croisiées : « *il a croisé ses blanches mains* »
il ot parée la loge : « *il avait préparé la loge* »

6.8 語順 (ORDRE DES MOTS)

今日のフランス語においては、語あるいは語群の機能 (主語機能、目的格補語機能等々) は、一般に文章中で語 (語群) が占める位置によって示される。格語尾の消失がそれを強いるのである。*Le père réprimande le fils* (父が息子を叱責する) と言おうとして、*Le fils réprimande le père* とすることは出来ないであろう。

一方、古フランス語においては、主格と被制格の二格が存在することにより語機能が識別可能なため、単語を幾倍も自由に配置する余地がある。*Le fils castoie li père* と言っても曖昧なところはない。というのも、形態上間違いなく *le fils* が目的格であり、*li père* が主格だからである。

しかしながら、いくつかの場合において、特定の語順を強制する規則が若干存在する。とりわけ重要なのは、属詞、目的格補語、副詞、副詞的な熟語で始まる節においては、主語は常に動詞のあとに位置するという規則である。

98 第 6 章 若干の統辞論的事実 (QUELQUES FAITS DE SYNTAXE)

[例] **halt sont li pui** : « *les monts sont hauts* »
ço sent Rolanz : « *Roland s'en aperçoit* »
de nos barons fu tels li consels : « *le conseil de nos barons fut tel* »
lors parlerent li evesque : « *alors les évêques parlèrent* »

第 7 章

詩法 (VERSIFICATION)

7.1 音節数 (NOMBRE DES SYLLABES)

中世の詩法のうち、今日の慣用との関連上、以下の重要な特徴に留意する必要がある。

7.1.1 中舌母音 [e] の扱い

7.1.2 原則：音節数に数え入れる

中舌母音の e は、語末にある場合、原則として音節数に数え上げられる。^{*1}

<p>[例] Or tel vie (2 syll.) menez ici... [octosyllabe] Qui béent* (2 syll.) a avoir confort... [octosyllabe] Si furent menées (3 syll.) au feu... [octosyllabe]</p>

* beer : « aspirer »

7.1.3 中舌母音の e を音節数に数え入れない場合

■エリジョンしている場合 音節として数えない。

[例] Si bone vi(e) (1 syll.) ici menez... [octosyllabe]
--

^{*1} [訳注] 以下、[octosyllabe] は 8 音節詩行、[décasyllabe] は 10 音節詩行、[alexandrin] は 12 音節詩行を意味し、直前に引用された詩行の音節数を示す。

[訳者補足]

vie と ici が一続きに発音され、vie ici で三音節になる。

■詩行 (vers) の終りに来ている場合 音節として数えない

[例] Gautier, faites les nos semondr(e) (2 syll.)... [octosyllable]
Li un des autres rien ne sor(e)nt (1 syll.)... [octosyllable]

■前半句 (hémistiche) 末に来ている場合 十音節詩行 (décasyllabe)、十二音節詩行 (alexandrin) で前半句 (十音節詩行は、四音節目、十二音節詩行では六音節目) の終りに来る場合も、中舌母音は音節数に数えない。

[例] En douce Franc(e) || s'en repaire li reis [décasyllable]
Les mains li li(e)nt || a corroies de cerf [décasyllable]
Se partot avoit ev(e) || tels buvroit qui a soi [alexandrin]
Gardez dont vos venist(e)s || et ou vos reviendroiz [alexandrin]

7.1.4 複合母音字

今日一つの音節としてしか数えない幾つかの複合母音は、かつては、二音節に数えた。それらの複合母音は、語源的には、もともと二重母音ではなくて、最初は独立した二つの母音に相当したのである。

[例] sain (< SANU) に対し、sain (< SAGINU);
paume (< PALME) に対し、aüner (< ADUNARE);
pleine (< PLENA) に対し、veïs (< VIDISTI);
fleur (< FLORE) に対し、meür (< MATURU);
cuir (< CORIU) に対し、fuür (< FUGERE);
[原注] sain は saindoux (豚脂) という語に残っている。

7.2 詩節形式

中世の詩人は以下の詩節形式を用いた

■*distique* : 韻を踏んだ八音節詩行二行からなる。一般に韻文の物語 (conte, récit, roman) に用いられる。

■*strophe* : 韻を踏んだ音節不定の詩行三行以上からなる。抒情詩独特の形態

■ *laisse* : 同一の韻(*rime*)、あるいは半階音(*assonance*) を踏んだ詩行の連なり。十音節あるいは十二音節の詩行からなり、武勲詩 (*chanson de geste*) 独自の形態。

7.3 韻と半階音 (RIMES ET ASSONANCES)

■ 韻 : 各詩行の最終強勢母音 (あるいは複合母音) がそれに続く音素と同様、同音である。

[例] menu と venu、menue と venue、foi と loi、oie と foie、
tendre と vendre、peste と reste

■ 半階音 : 強勢母音及び強勢複合母音のみが均一である場合は、半階音 (*assonance*) と呼ばれる。

[例] tante と blanche、florie と conquise、marbre と visage、
bele と terre

半階音は武勲詩の作者が用いる詩節形式、*laisse* の特徴で、*laisse* で韻が踏まれるのは後期の武勲詩においてのみである。

今日の男性韻と女性韻の交替の規則は、古フランス語には存在しなかった。

第 8 章

語義

古仏語の単語の多くが、今日まで同じ形態のもとに保たれているにもかかわらず、今日とは異なった主要語義を有していたことに、読者は今後気づくことになるだろう。実地に読むことによってその実例を知ることになるから、今のところは以下の重要な語について注意を促すことで十分である。

- partir = *partager* (*s'en aller* の意にあらず。)
- arriver = *atterrir* (*venir où on voulait* ではない。)
- entendre = *faire attention* (*ouïr* ではない。)
- assez = *beaucoup* (*suffisamment* の意ではない。)
- pour = *à cause de, malgré* (*dans l'intérêt de* や *afin que* の意味だけではない。)

8.1 第三部の総括

一見現代フランス語と良く似た単語が並んでいながら、読もうとすると全く内容が理解できない、といったことが、特に初歩の段階では頻繁に起こる。それは、二つの理由による。第一に、現代語とは異なった統辞法が用いられていること、第二に、現代語とは異なった語義で単語が用いられていること、である。これらは、音声や形態ほど体系だったものではなく、しかも、覚える事が多岐にわたっており、習得が一番難しい。

統辞法に関しては、次のものがわかりやすい。

1. Lucien FOULET, *Petite Syntaxe de l'ancien français*, Honoré

Champion, 1982, ISBN: 2852030195

2. Philippe MÉNARD, *Syntaxe de l'ancien français*, Bière, 1994, ISBN: 2852760363

辞書は、次のものが手軽である。

1. Hilaire VAN DAELE, *Petit dictionnaire de l'ancien français*, Librairie Garnier Frères, 1939, ISBN:
2. Algridas Julien GREIMAS, *Dictionnaire de l'ancien français*, Larousse, 1979, ISBN: 2033403270

1 はすでに絶版、2 も現在ではハードカバーしか無い。古本で 1 や 2 のペーパーバックを見つけたら、多少値が張っても購入した方が良い。

なお、1 に関しては、現在、訳者の手により、画像を使った電子化が進行中である。

8.2 索引

次ページに始まる索引は、文法事項、ラテン語単語、古仏語単語の順に並んでいる。

Index

文法事項

assonance, 101
 distique, 100
 groupe conjoint, 26
 laisse, 101
 oil の起源, 91
 rime, 101
 strophe, 100
 アンテ・パエヌルティマ, 23
 韻, 101
 開音節母音, 26
 硬口蓋子音, 28
 疑似硬口蓋子音化, 53
 強勢音節, 23
 結合グループ (groupe conjoint), 24
 語中音添加, 61
 語頭音節, 23
 語頭音添加, 60
 語末音節, 23
 歯音, 26
 子音前の l の母音化, 27
 自発的二重母音化, 26, 29
 自発的二重母音化 (A の), 28
 自発的二重母音化 (狭音の E の), 32
 自発的二重母音化 (広音の E の), 31
 自発的二重母音化 (狭音の O の), 38
 自発的二重母音化 (広音の O の), 36
 第一次硬口蓋化, 51
 第二次硬口蓋化, 50
 パエヌルティマ, 23
 バルチュ効果, 30, 35
 半階音, 101
 半子音, 27
 半母音, 27

半母音化, 27
 非自発的二重母音化, 28, 37
 鼻母音化, 26, 41
 不等音節数名詞, 72–74
 プロトニック, 23
 閉音節母音, 26
 ポストトニック, 23
 ヨッド, 27
 流音, 26

ラテン語単語

- ADUNARE, 100
 AGNÉLLU, 56
 ÁLBA, 65
 ÁMAT, 29, 65
 ANGÚSTIA, 55
 ANTECÉSSOR, 61
 ÁPIU, 63
 ÁRBORE, 29
 ÁRCA, 50
 ARGÉNTU, 42
 ARGILLA, 54
 ARMATÚRA, 23, 24
 ART[E]MÍSA, 57
 ÁSINUS, 65
 AUGÚSTU, 55
 AURÍC[U]LA, 53
 BÁCA, 29, 50
 BACA, 27, 30
 BÁDIU, 59
 BÁRBA, 61
 BÉNE, 31
 BÓDIE, 37
 BODIE, 37
 BÓNA, 36
 BONITÁTE, 23
 BONITATE, 24
 BONITATEM, 24
 BÓNU, 36
 BÓVE, 64
 BRÁC[H]IU, 52
 CABÁLLOS, 65
 CABÁLLU, 42
 CAMBIÁRE, 41
 CÁM[E]RA, 66
 CAMÍSA, 42
 CÁMPU, 64
 CANTÁRE, 28
 CAPÉLLOS, 34
 CAPÍLLOS, 65
 CAPRA, 62
 CÁPSA, 61
 CÁPUT, 64
 CARBÓNE, 61
 CÁRRU, 50
 CATÉNA, 43
 CATHÉDRA, 43
 CÁUSA, 60
 CÁVEA, 63
 CÉNTUM, 50
 CÉRA, 35
 CERVU, 64
 CÍRA, 50
 CÍS[E]RA, 60
 CIVITÁTE, 50
 CLARITÁTE, 24
 CLAÚDERE, 53, 65
 CLÁVE, 53
 COAG[U]LARE, 56
 CÓMITEM, 24
 COMMÚNE, 40
 *COMPÁNIO, 73
 *COMPANIÓNE, 73
 CÓ(N)STAT, 38
 CÓ[N]S[UE]RE, 60
 CÓR, 51
 COR, 36
 CÓRIU, 37
 CORIU, 37, 100
 CORÓNA, 45
 CÓRPU, 61
 CÓRPUS, 51
 CORPUS, 26
 CORRÍGIA, 54
 CORRIGIA, 54
 CO[T]ÓNEU, 47
 CÓXA, 52
 CRÉDERE, 52
 CRESCÉNTE, 52
 CRÉSC[E]RE, 61
 CRÍNE, 52
 CRÚCE, 65
 CÚB[I]TU, 58
 CUBITU, 58
 DEĆANU, 50
 DÍG[I]TU, 55
 DIGNÁRE, 56
 DIÚRNU, 59
 DIVÍSA, 45
 DÓLIU, 37
 DOM[I]TÁRE, 46
 DÓNAT, 57
 DÓNU, 38
 DÓRMIT, 36
 DORM[I]T, 57

- DORMITÓRIU, 40
DÚB[I]TAT, 58
DUBITAT, 58
DÚPLU, 63
ÉLLOS, 34
ERRÁRE, 44
ÉSCA, 33
ÉSSERE, 57
FÁBA, 62
FÁLSA, 27, 29, 60
FÁMES, 27
FÁSCE, 52
FÉNDERE, 33
FENÉSTRA, 43
FENÓCULU, 40
FÉRIA, 34
FÉRRU, 31
FÍDE, 57
FILIA, 74
FINÍRE, 45
FIRMÁRE, 65
FLAGÉLLU, 54
FLAGRÁRE, 55
FLÓRE, 24, 38
FLORE, 100
*FLORIS, 74
FÓLIA, 37
FONTÁNA, 46
FRÁTER, 72
FRÚCTU, 41
FUGERE, 100
GÁLBINU, 61
GÁMBA, 53
GAÚDIA, 53
GELARE, 54
GÉNER, 72
GENERU, 54
GENTE, 54
GÓTTA, 38
GRÁNA, 55
GRÁNDE, 58
GRANDE, 29
GRÓSSU, 60
GÚLA, 55
HERI, 31
HIRÓNDINE, 44
HÓRA, 38
HÓRDEU, 59
HORTUS, 26
JU[D]ICÁRE, 47
LABRA, 62
LÁCRIMA, 52
LÁTRO, 73
LATRÓNE, 57, 73
LAUDÁRE, 56
LAVÁRE, 42, 62
LAXÁRE, 52
LÉGERE, 26
LEVÁRE, 43, 65
LÍBER, 72
LIBERÁRE, 23
LÍMA, 35
LIMA, 35
LÓNGE, 39
LUCÉNTE, 47
MÁC[U]LA, 53, 66
MÁIOR, 29
MAIOR, 30
MÁRE, 28
MATREM, 26
MATÚRU, 43
MATURU, 100
MÉDIU, 32
MEL, 31
MERCÁTU, 50
MERCÉDE, 35
MESSIÓNE, 44
MÍLLE, 35
MÓDIU, 59
MOLA, 36
MÓL[E]RE, 65
MONTÁNEA, 41
MONTANEA, 66
MOVÉRE, 45
MÚLA, 24, 40
MURÁLIA, 47, 66
MÚRU, 40
NÁSU, 28
NATÍVU, 56
NÁUSEA, 60
NAUSEA, 27
NERVU, 64
NIGÉLLA, 54
NÍGRU, 55
NÓMEN, 38
NÓVE, 64

- NÚLLU, 40
 ÓLTRA, 39
 ORNAMÉNTU, 24
 OTIÓSU, 46
 PACÁRE, 42
 PAGANU, 54
 PÁLEA, 66
 PÁLMA, 27, 29
 PALME, 100
 PAPILIÓNEM, 23
 PARÁRE, 26
 PÁRTE, 58
 PARTÍRE, 42
 PÁTER, 72
 PÁTRE, 57, 61
 PATREM, 26
 PAUSÁRE, 60
 PAVÓNE, 62
 PAVÓRE, 43
 PÉCE, 34
 PEDE, 31
 PEDICULU, 66
 PÉLLE, 31
 PÉRA, 32
 PERDÉNTE, 44
 PÉRDERE, 31
 PIETÁTE, 30
 PIGRÍTIA, 44
 PÍRA, 65
 PLACÉRE, 51
 PLAGA, 27, 54
 PLÁNA, 29
 PLÁNGERE, 27
 PLÉNA, 33
 PLENA, 100
 PLÚMA, 40
 PLÚMBU, 64
 PLUS, 60
 PÓLVERE, 39
 PÓMA, 38
 PORCÉLLU, 31
 PÓRTA, 36
 POTIÓNE, 46
 POTIONE, 27
 PRÉNDERE, 65
 PRETIAT, 59
 PRÉTIU, 32
 PROVÍNCIA, 52
 PURGÁRE, 53
 PÚRGAT, 40
 QUADRÁTU, 57
 QUADRIFÚRCU, 24
 RADICE, 43
 RÁTIONE, 42
 RATIOÑE, 65
 RATIONE, 59
 REGÁLE, 44
 REM, 31
 RÍG[I]DU, 55
 RÍPA, 62
 RO[T]ÚNDU, 47
 RÚBIU, 63
 RÚPTA, 61
 ŠABULU, 60
 SACCRAMÉNTU, 52
 SAGINU, 100
 SÁLVIA, 63
 SALVU, 64
 SANU, 100
 SÁPIAM, 63
 SAPÓRE, 38
 SCÁLA, 60
 SCÚTU, 60
 SÉBU, 64
 SE[C]ÚRU, 44
 SECURU, 51
 SENECIÓNE, 52
 SÉPIA, 63
 SERPÉNTE, 61
 SERVÍRE, 61
 SILVÁTICU, 44
 SING[U]LÁRE, 55
 SOL[I]DÁRE, 65
 SONÁRE, 46
 SÓROR, 74
 SORÓRE, 74
 SPÍNA, 60
 SPONGIA, 54
 STÁBULA, 60
 SUDÁRE, 56
 SUSPIRIU, 36
 TÁB[U]LA, 63
 TÉLA, 32, 65
 TÉNEA, 33
 TÉN[E]RU, 66
 TEST[I]MÓNIU, 57

TESTIMÓNIU, 39
TESTIMONIU, 39
TÍBIA, 63
TORNÁRE, 45
TÓRRE, 38
TRÁBE, 64
TREM[U]LÁRE, 66
TRÚCTA, 41
ÚNGULU, 55
VÁCCA, 29
VAGÍNA, 43
VALÉRE, 42, 61
VÉNDERE, 24, 27, 33
VENÍRE, 35
VÉRGA, 33
VERSÁRE, 60
VÍA, 24
VIBÚRNA, 62
VI[D]ÉRE, 44
VIDISTI, 100
VIG[I]LÁRE, 66
VIG[I]LARE, 56
VÍNU, 35
VINU, 35
VÍRGA, 53
VÍTA, 56
VÍVERE, 62
VÓCE, 40, 51
VOMÍRE, 46

古仏語単語 (音声)

- ache, 63
 agnel, 56
 aime, 29, 65
 als, 21
 altre, 21
 amor, 22
 amour, 22
 amur, 22
 ancetre, 61
 angin, 21
 angoisse, 55
 antre, 21
 arbre, 29
 arche, 50
 argent, 42
 argile, 54
 armeüre, 24
 armoise, 57
 aronde, 44
 asne, 65
 aube, 65
 bai, 59
 baie, 29, 50
 barbe, 61
 bien, 31
 bon, 36
 bone, 36
 bonté, 23
 bras, 52
 buef, 64
 bui, 37
 cage, 63
 cailler, 56
 carré, 57
 cent, 50
 cerf, 64
 chaaine, 43
 chaiere, 43
 chaire, 43
 chambre, 66
 champ, 64
 changier, 41
 chanter, 28
 char, 50
 charbon, 61
 chasse, 61
 chef, 64
 chemise, 42
 chevaus, 22
 chevax, 22
 cheval, 42
 chevaux, 21
 chevaus, 65
 chevets, 21, 34
 cheveus, 65
 chose, 60
 cidre, 60
 cire, 35, 50
 cisdre, 60
 cité, 50
 clarté, 24
 clore, 53, 65
 commun, 40, 41
 comte, 24
 corone, 45
 corroie, 54
 cors, 51
 cosdre, 60
 coste, 38
 coude, 58
 coudre, 60
 couste, 38
 creire, 52
 creistre, 61
 crois, 65
 croistre, 61
 cuer, 36, 51
 cuir, 37
 cuisse, 52
 daigner, 56
 denz, 22
 devise, 45
 doigt, 55
 dompter, 46
 don, 38
 done, 57
 dort, 36, 57
 dortoire, 40
 double, 63
 doute, 58
 doyen, 50
 dueil, 37
 els, 21, 34
 errer, 44

- esche, 33
eschele, 60
eschiele, 60
escu, 60
espine, 60
estable, 60
estre, 57
fausse, 29, 60
fei, 57
feire, 34
feltre, 21
fendre, 33
fenestre, 43
fenir, 45
fenoil, 40
fer, 31
fermer, 65
flaël, 54
flairer, 55
flëau, 54
fleur, 22, 24
fontaine, 46
fruit, 41
feuille, 37
geler, 54
gendre, 54
gent, 54
genz, 22
got(t)e, 38
goutte, 38
graine, 55
grand, 29
grant, 58
gros, 60
guaine, 43
gueule, 55
heure, 22
hier, 31
jambe, 53
jaune, 61
joie, 53
jor, 59
jugier, 47
lairme, 52
laissier, 52
larron, 57
laver, 42, 62
lei, 22
lever, 43, 65
lime, 35
livrer, 23
loer, 56
loing, 39
luisant, 47
maille, 53, 66
maire, 29
marché, 50
mei, 22
meisson, 44
mengier, 21
mer, 28
merci, 35
meür, 43
mi, 32
miel, 31
mil, 35
montaigne, 41, 66
mouvoir, 45
muele, 36
muet, 22
muid, 59
mule, 24, 40
mur, 40
muraille, 47, 66
naïf, 56
neir, 55
nerf, 64
nés, 28
neuf, 64
nielle, 54
noise, 60
nom, 38
nuef, 22
nul, 40
oiseus, 46
ongle, 55
oreille, 53
orge, 59
ornement, 24
oultre, 39
päien, 54
paiier, 42
paille, 66
paresse, 44
part, 58
partir, 42

- paume, 29
peau, 31
peor, 43
perdant, 44
perdre, 31
pié, 31
pitié, 30
plaie, 54
plaine, 29
plaisir, 51
pleindre, 21
pleine, 33
plume, 40, 41
plus, 60
poire, 32, 65
poison, 46
pomme, 38
por, 22
porte, 36
poser, 60
poudre, 39
pour, 22
pourceau, 31
prendre, 65
pris, 32
Province, 52
prueve, 22
pur, 22
purge, 40
purger, 53
rai, 43
raide, 55
raison, 42, 59, 65
rei, 22
rien, 31
rive, 62
roonz, 22
rouge, 63
route, 61
sable, 60
sache, 63
sairement, 52
salvage, 44
sanglier, 55
sauf, 64
sauge, 63
seiche, 63
seneçon, 52
senglier, 55
serpent, 61
servir, 61
seule, 22
seür, 44, 51
soner, 46
souder, 65
soupon, 36
suer, 56
suif, 64
table, 63
teigne, 33
tendre, 66
tesmoing, 39, 57
tige, 63
toile, 32, 65
tor, 38
torner, 45
tour, 38
trambler, 21
tref, 64
trembler, 66
truite, 41
vache, 29
vaine, 21
valeir, 42
valoir, 61
veiller, 56, 66
vendre, 24, 33
venir, 35
veoir, 44
verge, 33, 53
verser, 60
vie, 56
vin, 35
viorne, 62
vivre, 62
voie, 24
vois, 40, 51
vomir, 46

古仏語単語 (形態・統辞法)

al, 75
 als, 75
 ancessor, 73
 ancessors, 73
 ancestre, 73
 arriver, 103
 as, 75
 assez, 103
 au, 75
 aüner, 100
 aus, 75
 bon, 75
 bone, 75
 bones, 75
 bons, 75
 cel n'i a qui, 92
 cent, 76
 cenz, 76
 cest, 78
 chantëor, 73
 chantëors, 73
 chantre, 73
 cil, 78
 cist, 78
 coing, 72
 coinz, 71, 72
 com cel qui, 93
 compaignon, 73
 compaignons, 73
 compain, 73
 comte, 72
 comtes, 72
 cuens, 72
 cui, 77
 cuir, 100
 del, 75
 dels, 75
 des, 75
 deu, 75
 deus, 76
 doi, 76
 dont, 77
 dou, 75
 du, 75
 dui, 76
 el, 75

ele, 77
 eles, 77
 els, 75, 76
 emperëor, 73
 emperëors, 73
 emperere, 73
 entendre, 103
 es, 75
 eu, 75
 eus, 76
 fel, 73
 felon, 73
 felons, 73
 fille, 74
 filles, 74
 fleur, 100
 flors, 74
 fort, 75
 frere, 72
 fruit, 71
 fruiz, 71
 fuir, 100
 garçon, 73
 garçons, 73
 gars, 73
 gendre, 72
 genz, 74
 grant, 75
 huem, 72
 (i)cel, 78
 (i)cele, 78
 (i)celes, 78
 (i)cels, 78
 (i)celui, 78
 (i)cest, 78
 icest, 78
 (i)ceste, 78
 (i)cesti, 78
 (i)cestui, 78
 (i)ceus, 78
 (i)cez, 78
 (i)cil, 78
 icil, 78
 (i)cist, 78
 il, 76
 je, 76
 jo, 76
 jou, 76

- la, 75, 77
larron, 73
larrons, 73
le, 75, 76
lerre, 73
les, 75–77
li, 75–77
livre, 72
lo, 75
loial, 75
lor, 76, 77
lui, 76
maisons, 74
maistre, 72, 73
maistres, 72
me, 76
mei, 76
mendre, 73
menor, 73
menors, 73
meür, 100
moi, 76
mont, 71
monz, 71
mur, 71
murs, 71
nos, 76
nous, 76
om, 72
ome, 72
omes, 72
on, 72
ou, 75
partir, 103
pastor, 73
pastors, 73
pastre, 73
paume, 100
pere, 72
pleine, 100
pour, 103
que, 77
qui, 77
quoi, 77
roond, 71
roonz, 71
sain, 100
sain, 100
seignor, 73
seignors, 73
seror, 74
serors, 74
sire, 73
suer, 74
te, 76
tei, 76
toi, 76
traïtor, 73
traïtors, 73
traïtre, 73
travail, 72
travauz, 71, 72
trei, 76
treis, 76
trovëor, 73
trovëors, 73
trovere, 73
tu, 76
veïs, 100
vert, 75
vingt, 76
vinz, 76
vos, 76
vous, 76

*

*